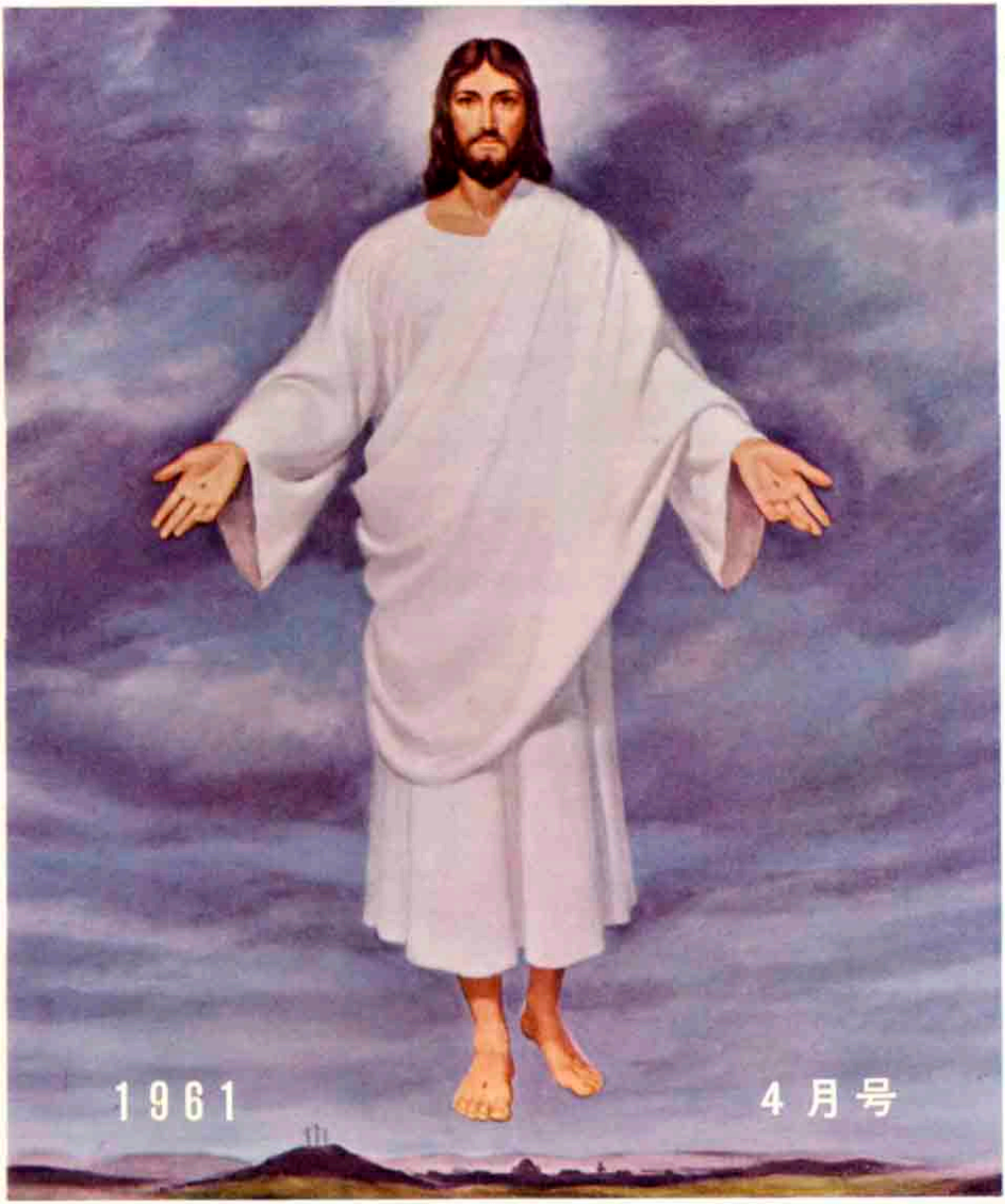
聖徒の道

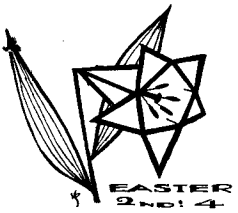
一九五八年三月十七日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
第五巻 第四号 一九六一年四月一日発行



末日聖徒イエス・キリスト教会

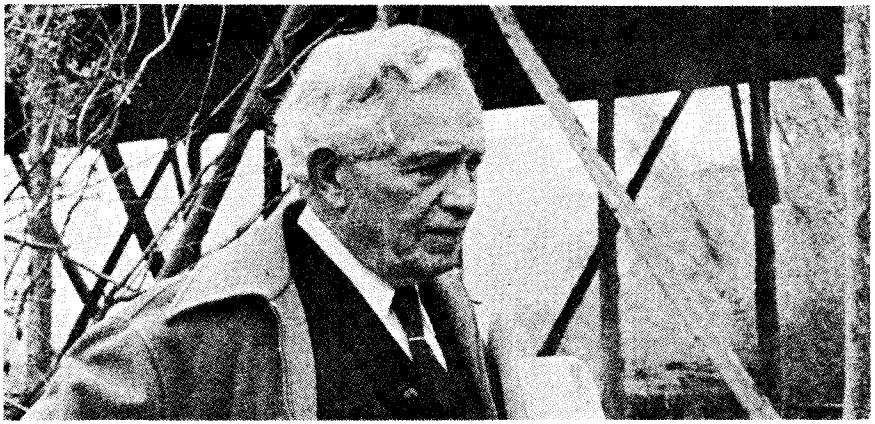
聖 徒 の 道

1961年4月号



もくじ

〔予言者のことば〕
復活せる贖主 …… テヒド•O•マッケイ…(169)
〔伝道部長メッセージ〕
あなたも神の計画の協力者になろう
…… ポール•C•アンドラス…(173)
〔モルモンの教義〕
先在の教義(24) …… 佐藤竜猪…(177)
教会は三人の十二使会
補助を任命する ……(181)
〔東中央地方部〕
今年最初の地方部大会開く ……(182)
復活祭に憶う …… 安芸 宏…(186)
ユタ物語(完)…リーヴァイ•エドガー•ヤング…(188)
勤労奉仕宣教師の経験 … ユージェス•T•大島…(190)
イースターとマグダラのマリヤ … 大塚呂治…(193)
伝道本部だより ……(197)
〔質問への答〕
一夫多妻制度について……
ジョセフ•フィールディング•スミス長老…(198)
末日聖徒イエス•キリスト教会歴史粋(16)
…… ジョセフ•フィールデイング•スミス…(201)
若き世代の発展のために …… 中野百合子…(204)
〔モルモン家庭訪問〕
上野山家を訪ねて(第一回) ……(207)
ヤンガージェネレーション
友への手紙 …… 東海林絹江…(209)
人間の弱さについて …… 佐伯忠晴…(211)
〔大会説教〕
家族の永遠の交わり
……エルレイ•L•クリスチャンセン…(213)
メルケセデク神権 ……(214)
〔アロン神権〕
ブランチ•ティーチングレッスン ……(216)
日曜学校ガイド 5月用……(217)
MIAリーダー ……(222)
扶助協会レッスン ……(224)



予言者のことば

復活せる贖主

大管長　デビド・O・マッケイ

「われ知る、我を贖うものは活く、後の日に彼かならず地の上に立たん。わがこの民この身の朽はてん後われ肉を離れて神を見ん。我みずから彼を見たてまつらん、我目かれを見んに識らぬ者の如くならじ、我が心これを望みてこがる」（ヨブ記十九章二十五～二十七節）

このように生ける贖主について証しの出来る人は永遠の生命への道を歩みつつある人である。

イエスが墓より甦えられたとの最近の、また最も大いなる確証はキリスト教徒がこの復活を初めて祝ってから千八百年後に、ジョセフ・スミスに天父と御子が現われたもうたという事であろう。従ってキリスト教会が人類の歴史中最も有意義な、最も記念すべき出来事、キリストの復活を祝うために、毎年一回復活祭を執り行っているという事は高く評価されねばならない。

復活という奇蹟の重要性は、復活それ自体の中に存するばかりか、真実のキリスト教のすべての根本原則の真髄でもある。

この世界の若干の政府の指導者がこの復活の事実である事を信じていないのは明白であるし、また彼らが復活を一つの事実として受け入れないどころか、

むしろ神話か、迷信としか考えていないのも明白である。

今日、死者の復活について語るなら、必ずこれを嘲笑したり、疑ったりする人のあるのは事実である。多くの人たちは復活した主なる神に思いを馳せるより、むしろ古代アテネやローマにあった種々な、数多くの神々—快楽の神、富の神、放縦の神、政権の神、名声の神等に夢中になっている。

人の心に最も深く根差している考えはしばしば人間の行動を決定するのが普通である。それ故、「快楽と富と名声のはびこるこの世にあって、人世で最も価値あるものは何か」とすべての人間に教えさとすのをモットーとする復活祭の如き儀式が今日この世で行われるのは、誠に全世界にとって大いなる祝福である。

この警告に注意し、心の中に安らぎを得んと願う人たちは、この世で最も大切な質問が不死不滅に関わるものである事を知るに至るであろう。ある鉄道会社の上役の一人が「若い青年と世界」という書物の中で、「私は、人間は死ぬと、合衆国のすべての富を所有したり、またこの世の与えるすべての名誉ある、力ある地位を占めるより、むしろ、自分で自分を意識しつつ再び生きるのであるという事に強い確信を懐いている」と書いていた。

キリストが再び肉体を得られて、栄光ある復活体をもって現われたもうたという事実を考えてみよ。そうすれば「人は死ぬと、再び生きるのであろうか」という質問が自然に答えられるであろう。

文字通り墓よりの復活がキリストを信じていた弟子達に事実として認められたのは真である、彼らの心の中にはみじんの疑惑もなく、彼らは実にこの事実の証人であった。彼らはまなこをもって見、耳をもって聞き、また復活された贖主の体に手を触れた故に、心の中に何ら疑いの気持を持つことがなかった。

父なる神

いかなる人も神の存在を受け入れ認めなかったら、復活を受け入れる事も、また己の信条も調和させる事も出来ない。復活によりキリストは死を克服したまい、文字通り不死不滅の存在となられた。「我が主、我が神」は復活された主を自分の「まなこ」をもって見た時に叫んだトマスの言葉である。彼の前に立ち給うたのは神であった。一度キリストを神として受け入れると、神が丁度キリストの如き御方であると容易に想像出来る。なぜならイエスは左のように仰せになったからである。「ピリポ、我かく久しく汝らとともにおりしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば『我らに父を示せ』と言うか」

神の存在について考えることは神をこの世の創造主であると受け入れる事に深い関連がある。真実のキリスト教はこの宇宙を物質と動機の単なる組合わせの結果であるとは考えず、むしろすべての創造は神によってなされたと教えている。

御子なるイエス・キリスト

福音はキリストが神の御子であり、世の贖主であると教える。キリストを単なる改革者、偉大なる教師、一人の完全な御方としか見なさない人は、真実にイエス・キリストに従う人ではない。「ガラリヤの人」は比喩的でなく、文字通り生ける神の独子であった。

霊魂の不死不滅

復活を信ずる事は人間の不死不滅をも説明している。イエスはあなたがたや私のようにこの世のすべての経験をされ、幸福を知り、また苦しみをも味われた。イエスは他の人たちと世のよろこびを共にされ、悲しみ合われ、更に他の人の友情という事が如何に美しいものであるかを身をもって体験された。また、反逆者や偽証をたてる者のために悲しみを味われ、最後に死を経験されたのであった。しかしながら、御子の霊は死後も生きたのであるから、あなたがたの霊も、また私の霊も死後必ず生きるであろう。

人間の兄弟愛

他の大いなる原則がすべて従属するところの二つの大いなる原則は「己の如く汝の隣人を愛せよ」である。この原則は「まことに汝らに告ぐ。わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」（マタイ伝二十五章四十節）という約束に深いつながりがある。

福音は「強き者」に「弱き者」の重荷を引き受けるように、また普通の利害関係において「強き者」はより大きな機会にあずかる故、その機会を弱き者のためにも活用するようにと教えている。これは人間性のレベルがこれによって高められ、霊的達成への道が「強き者、英智ある者」に対してのみならず、最も虚弱なる者、最も無智なる者にも開かれんがためである。

人生の標準

最後に、イエスがこの世に生きて居られた一人の完全な御方であり、死より甦えって、死を克服され、今や世の

救主である事を認めると、キリストを拒絶することが単に不幸と死に導くものであるとはっきり知られる今日、キリストの定めたもうた道を故意に拒否する事がいかに愚かな事であるかを理解するであろう。もし、例えばすべての人が「兄弟にうらまれることあるを思い出さばまず行きてその兄弟と和睦せよ」「まず神の国と神の義とを求めよ」というキリストの教えに忠実に従っているなら、この世界はどれ位住み良いところになるであろうか。この生活はこの世的な事を霊的なこと以上に価値あらしめようとしない、極めて霊的な生活を意味する

救主は偽善を非難し、目的に誠実な事をよろこびたもう。常に自分の心を清く保つように努力しよう。そうすれば、必ず行いもこれに応じて清くされるであろう。社会的な罪—偽言、盗み、不正直、姦通等は必ず最初心の中に犯される罪である。

イエスは汚れのない人格を育成せしめる事がこの世の最もけだかい目的であると仰せになった。ジョン・W・パウエルは次の如き適切な言葉を言った。「財産、名声、名誉、成功、繁栄、肉体的な快楽、平安—これらはみな完全に人間の心を満足せしめるものでもなければ、人生の最も高き要求を成就するものでもない。いかなる人もすべての誘惑の試練に打ち克ち、常に神と交わることによってその人格を育成せしめた」と。

「主は生けると知る」という言葉の中に証詞の真実の意義がある。いかなる人も自分の心の中に、ある変化を意識せずして、決してナザレのイエスの教えを日常生活に応用する事は出来ない。「再び生れ変る」という言葉には普通の人々が考えるより、はるかに深い意味があり、この心の変化は書き出すことは出来ないかも知れないが、真に真実そのものである。

生けるキリスト—救主にたえず近くある事によって、自分の心をいつも高めようと心がけている人はまことに幸いである。

キリストは死後も生きたもうのであるから、すべての人間もそうであって、来世に於て自分自身に適した「所」を受けるであろう。故に復活のおとずれは万人にとって最も心に安らぎと平和とを与える最も輝やかしきものである。人が死んでこの世を去っても、残された人々の心は、「主はここに在まさず、甦えりたり」という言葉と希望とによって慰めを受けるからである。

《伝道部長メッセージ》

―家族ぐるみの改宗計画―

あなたも神の計画の協力者になろう

ポール・C・アンドラス

唯今、進歩の新しい時代しかも大きな新時代が世界中にある私たちの教会組織に大へんな勢でひろがっております。この進歩の大浪を見ると私は「末の代に天の神が一つの国を建てたもうが、これはいつまでも亡びることなく、人手によらずに山から切られて出た一つの石のように進んで行ってついに全地に充ちるにちがいない」(ダニエル書第二章参照)というダニエルの予言を思い出さずにはおられません。私はまたイザヤが予言した「驚嘆すべき業と不思議」をも思い出します。というのは、私たちが今やこれらの予言が実際に現われている過程を本当に目で見ているからであります。

この進歩の新しい時代は教会のあらゆる面に影響を及ぼしていると思えますが、それはおそらくバプテスマを受けた改宗者の数と全体から見た教会員の数とが増したことに一番よくあらわれているでしょう。千九百六十年中にバプテスマを受けて教会に入った改宗者の総数は千九百五十九年よりも四十七%多くなって居り、会員増加の割合は千九百五十九年の増加割合よりも概算三十二%多くなって居ります。千九百五十九年中にバプテスマを受けた改宗者の総数は三万三千名に達しましたが、千九百六十年中にこの数字は一躍四万八千五百八十六名に達しました。千九百五十九年中に増加した教会員の数は正味六万二百八十九名となっております。ところで、千九百六十年の最終的数字はまだ発表されておりませんけれども、私の個人的推測によると教会員の数はかけねなしに約八万名の増加を示しております。これで千九百六十一年の終りには教会員の総数が百七十万名近くになるでありましょう。

昨年の増加率で、わが教会は現在約二十年毎にその会員数を倍増して居ります。そこで、現在の会員数の倍の倍と、これを十二回くり返すと会員数が七十億近くになることに目をつけると興味があります。言葉を換えて言うと、二十年毎に会員数が倍増しつずけると今から二百四十年たたぬうちに世界中の人間が一人のこらずモルモ

ンになってしまうでしょう。さて、十年毎に会員数が倍増するところまで増加率がふえたら、または五年毎に会員数が倍増するところまで増加率がふえたらどんなことになるでしょう。これは面白い考えですが、救い主の再臨は世界中の人間が一人のこらずキリストの教会へ改宗して入るよりもずっと前に起ることを、私たちが落ちついて実感するときに、その考えはもっと私たちの心をひくものにさえなります。世界中の人間が全部改宗する時が、そんなに遠くないという考えは、再臨が近づいているということを確かに強調しております。

「然るに世の人々は、正にその欲するままに人の子をあしらえり。彼は、今自らの権能を持ちて父の栄光の右手に立ち天にありて統治す。而して、彼は地に下りてすべての敵を脚の下に踏みつくるまで天にありて統治せん。然もその時は近づけり」（「教義と聖約」四十九〇六）。

主の教会に属する会員は皆、救い主の再臨に備えて神の王国を建てるため活潑に仕事をせねばなりません。主の教会員の多くは、王国を建てる仕事を実際活潑に行っておりますが、不幸にもこの偉大な計画に従って活潑に働いていない会員がたくさんあります。あなたはどちらの部類に属しますか。もうすでにあなたが主の王国を建てる仕事を活潑に行っているならば、主はあなたをお喜びになってあなたの献身的な働きに対して豊かな祝福をお与えになるにちがいありません。

今はあなたの努力を新たにして、主の御業のためにこれまでよりは一層大きな貢献をする時ではありませんか。もしもあなたがまだ神の御国を建てるために本当に活潑に働らいていない人々の仲間であるなら、今こそこの最も偉大な神国建設の働らきのために起ち上ってあなたの全勢力を投ずる機会であります。もしもそうするなら豊かな祝福があなたを待っております。

しかし、人はどのようにして活潑な働きに着手しますか。特に神国建設の働きを助けるため、正に何をすることができますか。以上の問に対して少くとも四つの答えがあります。まず第一に、あなたは毎日の生活で律法と誡命と教会の教えを実行することによって、教会をますます強化することができます。あなたの家を整え、あなた自身が良いモルモンになることによって、あなたは同時に教会全体の力を向上させるのであります。次に、あなたは教会の集会に出席し、教会の催おすいろいろな活動に参加し、また教会の組織の一つで役員もしくは教師として働くことによって、完成の手伝いをすることができます。第三に、あなたは自分のお金を惜しみなく教会へ寄附することによって神国建設の働らきに力を添えることができます。什分の一の律法は主の真の教会に属するすべての教会員が守るべき義務でありますが、完全に什分の一を納めた上に断食献金、支部予算、宣教師資金とくに建築資金に惜しみなく寄附をすることによって、あなたは全世界に神の御国を文字通り建てる働きに活潑に参加することができます。第四に、あなたは世の人々に教会の教義を説き明してこれらの人々を改宗させ、バプテスマを受けさせることによって、神国建設の働らきの中で活潑なまた肝心な役目を勤めているのであります。

私共の教会の教えを世の人々に説き明すことは、会員の一人のこらずが持っている良い機会であるばかりでなく、また実際一人のこらずの会員の守るべき厳粛な義務であります。このことは「教義と

聖約」第八十八章の八十一節に明らかにしてありますが、そのところで主は「すべての人はその隣人を警しむる責任あり」と仰せになっておられます。さて私はここに言ってある「警しむる」という言葉は「教える」という意味であるということをはっきりさせたいと思います。それで、この聖句は、真の福音を教えられた者は一人のこらずその福音を隣人に教える義務がある、ということをはっきりと告げております。主はまた、

「されど汝らの中、或る人々はわが悦ぶところにあらず。そは彼ら人を怖れて、己が口を開かんとせずしてわが与えたる才能をかくすによるす。禍なるかな、かかる人々よ。わが怒りは彼らに向いて燃ゆればなり」と仰せになっております。（「教義と聖約」六十〇二、三参照）。

さて、私は各会員が世の人々を「警しめる」とき、もしくは言葉を換えて言えば「教える」とき、その助けとなる提案を二三申上げたいと思います。まず第一に、私は教会員の一人一人が、今宣教師たちの用いている「標準教授計画」をよく知っているようになることを提案します。この本を一部買い求めて、その中に書いてある七つのレッスンを教える方法を習い覚えて下さい。一度覚えてしまうと、あなたは人に教える材料を備えていることになりますが、あなたは世の人々があなたにそのレッスンを教えてもらうことを同意するよう、充分興味を覚えさせる方法を持たなくてはなりません。あなたは自分で巧みにこのような興味を起させることができるかも知れません。しかし、私は今ここで教会の宣教師の働きの中で「福音の回復を伝える言葉」による手引き、と言われているものに精通してこれを利用するように提案したいのであります。

この「福音の回復を伝える言葉」による手引き、は、本当に五つの力強い言葉からできております。すなわち、

一、イエス・キリストは神の御子であって、世の救い主であります。二、ジョセフ・スミスは真の予言者であります。三、神の真の教会が回復されました。四、モルモン経は神の言葉であります。五、救いの計画が啓示されました、の五つであります。

私は、あなた方が非教会員の友だちに興味を起させるため、聖霊の導きたもうように、この五つの真理を伝える言葉を利用することを提案いたします。これらの言葉を使うとき、あなたは自分の証しを述べることが大切であります。

例えば、あなたは自分の友だちの一人に次のように言うこともできるでしょう。

「中村君、君は僕がモルモンだということを知ってるね。僕は本気で君に言いたい、モルモン経は神の言葉であって、僕はそれが本当だということを知っている。君、僕の家へ来て、僕がもう少しこのすばらしい本の話をするのを聞いてくれないか」と。

または、もしあなたが聖霊の導きを感じたなら、ほかの言葉の中から一つを選んで次のように言うこともできるでしょう。

「中村君、神のまことの教会がこの地球上へ回復されたから、人類は神のまことの教えをまた聞くことができるのだよ。僕はこれが本当だということを知っている。君、僕の家へ来て、僕がもう少し神のまことの教会の話をするのを聞いてくれないか」と。

または、次のように言うこともできるでょう。

「中村君、イエス・キリストは神の御子でこの世の救い主だ。クリスチャンの人々はイエス・キリストのことを知っていると言うが、

彼らの教義はイエス・キリストが神であることを否定し、イエス・キリストが教えたこともない教えに従っている。僕はこれが本当であることを知っている。君、僕の家へ来て、僕がもう少し神の本性について話をするのを聞いてくれないか」と。

もし、あなたがジョセフ・スミスについて伝える言葉を話すように導きを受けるなら、次のように言うこともできるでしょう。

「中村君、君は神が現代に真の予言者を現わしたもうたということと、この予言者を通してきわめて大切な多くのことを啓示したもうたということを知りたいと思っていると僕は信ずる。僕はこれらのことが本当であるということを知っている。君、僕の家へ来て、僕がこのジョセフ・スミスという大予言者のことをもう少し話すのを聞いてくれないか」と。

救いの計画について伝える言葉を話すときには、次のように言うこともできるでしょう。

「中村君、君はこの世の生活の前に生活があったかどうか、この世の生活の目的は何であるか、死んだらどこへ行くかなどについて知りたいと思ったにちがいない。神はこれらの疑問の解答を啓示なさった。僕はその答えが本当であることを知っている。君、僕の家へ来て、僕がこれらの疑問に対する答えについてもう少し話すのを聞いてくれないか」と。

もしあなたが独りでレッスンを教える確信がないと思うなら、あなたと会うように宣教師にたのみなさい。

以上五つの伝える言葉、すなわち五つの根本の言葉を話すとき、あなたは友だちや親戚の人々の多くに興味を抱かせることができるにちがいありません。もしも一つだけ伝える言葉を話してこれらの人々に興味をもたせ、話を聞く約束を結ぶことができないとき、もう一つの言葉を伝えるよう聖霊に導かれたと感じたら、即座にもう一つの伝える言葉を話しなさい。それから、もう一つ、またもう一つと、五つを全部話してしまいなさい。もしも、一度に五つともみな話そうとしてもできないとき、またはそうするのが賢いとは言えないときには、聖霊の導きたもうままに、別の機会に一度に一つもしくは二つの言葉を伝えようとすることができるでしょう。これらの伝える言葉を一つもしくはそれ以上話すなら、おそらくそれはあなたの親戚や友だちの一人一人を感動させ、宣教師のレッスンを教える約束をとりつけることができるでしょう。しかし、そのレッスンを教える約束をとりつけることができなくても、あなたはこれらの人々に「教えた」のであります。あなたは「イエスは神の御子であって世の救い主である。ジョセフ・スミスは真の神の予言者である。神の真の教会は回復された、モルモン経には神の言葉がのっている。救いの計画が啓示された」ということを述べて証しをしたのであります。あなたは、あなたの隣人に「教えた」ときあなたの義務を果したのであります。あなたの言葉を耳にする人が、あなたの「教える」言葉にすぐと応じなくても、その人はあなたの伝えた言葉をとっくりと一二週間、もしくは一二箇月間、もしくは一二年間も考えた末、あなたの言葉に応ずるかも知れません。今すぐと、この近づき方をあなたの親戚と友人知己に用いて下さい。

さてここで、家族単位で教えることが大切であるということを提案し且つ強調させて下さい。教会に加入する時に、改宗者が一人一人別々に入ってくる代りに、家族単位で皆一しょに入ってくる方が教会にとっても改宗者自身にとってもずっとよろしい。それである

〈一九二頁につづく〉

「先在の教義」（二十四）

佐藤竜猪

汝らもまた太初に御父と共に在りき。

「教義と聖約」九十三〇二十三

一、霊の子ら

すべての人間は此世へ来る前、すなわち先在の状態（前の世もしくは第一の位）に於て、「父なる神」から生れた「霊の子」らであった。キリストは「太初にわれ御父と共に在りき。われはその長子なり」と自分自身について言い、次にすべての人間について「汝らも太初に御父と共に在りき」と仰せになった（「教義と聖約」九十三〇二十一、二十三参照）。多くのキリスト教徒は、イエス・キリストが此世へ生れて来たもう前に、先在の状態（前の世）に於て「神の子」で在られたことを信じているが、（ヨハネ伝十七〇五「父よ、まだ世にあらぬ前にわが汝と共にもちたりし栄光をもて…」を参照）、すべての人間も此世へ来る前に先在の状態（前の世に）在ったことを信じていない（「救いの教義」第一巻五十六頁参照）。

すべての人間は「父なる神」と「母なる神」との間に「霊の子」らとして生れた。「父なる神」がある以上「母なる神」があるということは、大管長会（ジョセフ・F・スミス、ジョン・R・ウインダー、アントン・H・ランドの各長老）によって明瞭に宣言された真理であって、人間は「天にまします両親の間に霊の子として生れ、天にまします父なる神の邸に於て養育されて一人前となった」、「日の光栄を持ちたもう父母の間に生れた者であり」、「すべての人間は、男も女も、すべての人間の父なる神と母なる神との同じ姿かたちを持っており文字通り神の息子娘たちである」と言ってある（「人間、その起原と将来」三四八、三五五頁、マッコンキー長老著「モルモンの教義」四六七、四六八頁参照）。

このことはまた「末日聖徒讃美歌」（旧版）第百十九に「天の御親をば、一人ともすか、母も天にありと、理りは告ぐ」と表現してある。

人間は此世へ来る前に、霊体を持った者として神の御前に住んでいた。この霊体は今われわれが持っている肉体を構成している元素よりは「ひときわ極微純粋」な元素から成り（「教義と聖約」百三十一〇七）、その姿かたちは現世におけるわれわれの姿かたちと同じであった（モルモン経、イテル書三〇十六参照）。人間は神の御前に住んではいたが、神と同じ体を持ってはいなかった。先在の状態において人間の持っていた体は霊体であって、「骨肉を具え、霊によって生かされる復活体」（「救いの教義」第一巻十十六、七十七頁参照）ではなかった。しかし、神はこのような体（復活体）を具えて日の光栄の最高に昇り、太陽の輝やきよりも勝れた赫々たる栄光と霊妙なる能力とをそなえた御方である（「救

いの教義」第一巻五十七頁参照)。

二、天上の会議

人間が「父なる神」の御前に住んでいた前の世に於ては、教えを受けるための集り評定をするための集りが、神々とその「霊の子ら」との間に度々催おされた(マッコンキー長老著「モルモンの教義」百五十一頁参照)。そして、人間がその「存在の道程」の中で進歩をし、現世というこの仮の世を通り過ぎるべき時が来たとき、一つの会議が開かれた。この会議に於て、地球の創造と、創造されたその地球上に人間を住まわせることと、また「神の子ら」であるその人間を贖い(父なる神の前に戻し)救う(日の栄の最高に昇らせる)道が説き聞かされた。すなわち先在の状態(前の世)に於て人間は霊体であった。人間が進歩発達をしてついに完成の目標へ達するためには、人間は「死すべき体」を受けて現世の生活を送り、そこで自らを試ろみ多くの艱難と障害とをふみ越えて「日の栄の最高」に昇る資格を具えることが必要であった。人間は、この「死すべき身」を持った現世の生活に於て、すべての誡命を忠実に守り行うならば、「父なる神」と同様に栄光に輝やく「復活体」を具えて「日の栄の最高に昇れる」ことを教えられた(マッコンキー長老著「モルモンの教義」百五十二頁、「救いの教義」五十七頁参照)。

「かの時にはあけの星相ともに歌い、神の子たちみな喜びて呼ばわりぬ」(ヨブ記三十八〇七)。「あけの星」とは先在の状態に在った「霊の子ら」すなわち「神の子たち」のことである(マッコンキー長老著「モルモンの教義」四六五、六九一頁参照)。

三、救いの計画

天上の会議が開かれたとき、「父なる神」はその「霊の子ら」を御前に呼び寄せ、一つの計画を示したもうた。これによると、「霊の子ら」はこの地球上へ降って来て、「死すべき体」をとり、この「死すべき身」をもった現世の生活の中でいろいろな経験すなわち楽しい経験と共に悩みも苦しみも嘆きも誘惑も、人の世におけるいろいろな経験をへた後、もし神の誡命に忠実であったなら、復活をへて神の御国(日の栄の王国)の最高に昇り、そこで「神に似る者」(ヨハネ第一書三〇一—三参照)となり、神と共に神と同じ生活(Eternal life)をするということであった(「救いの教義」第一巻五十八頁参照)。

すなわち、神は、神の生みたもうた「霊の子ら」にも、自らと同じように進歩して神の位に昇ることのできる特権が得られる律法—道—を制めてやるのがよいと思し召した。それであるから、「救いの計画」(贖いの計画、昇栄の計画)は「霊の子ら」がこれを履み行うことによって、「父なる神」と同じ高い状態に昇る能力を授けられることできるすべての律法と、儀式と、原則と、教義とを含む(「予言者ジョセフ・スミスの教え」三五四頁、マッコンキー長老著「モルモンの教義」五二〇頁参照)。

四、天上の戦い

「救いの計画」は「父なる神」が制めたもうたところのものであって、これによって「神から最初に生れたもうた御子、イエス・キリスト」を始め、すべての「神の子ら」が「日の栄の最高」に昇ることのできる道である。

また、この「救いの計画」はこの世における人間にとっては「イエス・キリストの福音(道)」である(マッコンキー長老著「モルモ

ンの教義」五二〇頁参照)

天上の会議が催おされて「救いの計画」が示された時、この呼びかけに応じて「神の愛しみたもう御子」イエス・キリストは「父よ御旨の成らんことを。栄光とこしえに父にあれ」(「高価なる真珠」モーセの書四〇二)と答え、「救いの計画」通りに「贖い主」となることを、喜んで受け入れたもうた。しかし、もう一人「権威ありし神の一天使」(暁の子ルシフェル)(「教義と聖約」七十六〇二十五、二十六)が進み出て「見たまえ、われを遣わしたまえ。われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以てわれに汝の誉を与えよ」(「高価なる真珠」モーセの書四〇一)と言って「救いの計画」に修正を施し、すなわち「救いの計画」の重要な部分である「人間の自由意志」(ニーファイ第二書二〇二十六—三十、十〇二十三、アルマ書十三〇三、ヒラマン書十四〇三十一参照)を「救い」の条件から取り去って「自由意志」によらない「救い」を提議すると共に、イエス・キリストが「贖い主」に選ばれることに反対し、また「われに汝の誉を与えよ」と「父なる神」の座を奪う異志を明らかにした(「救いの教義」第一巻六十四頁参照)。

「父なる神」がこの提議をしりぞけて「われ先の者を遣わさん」と宣うたとき、「暁の子」ルシフェルは怒って神に謀叛し、三分の一の天群も共に叛かせてその第一の位(おるべき所)を捨て去った(「高価なる真珠」アブラハムの書三〇二十七、二十八「教義と聖約」二十九〇三十六、ユダ書六参照)。

このようにして「権威ありし神の一天使」「父なる神」から早いころ生れた「暁の子」ルシフェル、またはサタンは三分の一の天群と共に投げ落されて悪魔とその使たちとなった(「教義と聖約」二十九〇三十六、三十七、「高価なる真珠」モーセの書四〇一—四参照)。これらの「霊の子」らが「救い」を得られるように「父なる神」の制めたもうたいろいろな条件を拒絶し、「真理なる光明」に謀叛をした事件を黙示者ヨハネは天上の戦として証している(黙示録十二〇四—九、マッコンキー長老著「モルモンの教義」七五〇頁参照)。

五、「先在」の状態に於ける霊

「父なる神」はその「霊の子ら」が霊界に在った時にさえ、個々の「霊の子」が善を選んで悪をすてるか、或いは悪を選んでその悪の結果を蒙るか、いずれかを自ら選び取る能力すなわち「自由意志」を与えたもうた。このように「自由意志」がある結果、霊界に在ってさえも或る「霊の子」は他の「霊の子ら」よりも神の誡命をよく守り、ほかの者よりも偉大な「英知」を具えていた。それであるから、「父なる神」はそれらの中から或る者を召して、神の予言者もしくは、支配者として「預任」したもうた。エレミヤ書第一章五節には「われ汝を腹につくらざりし先に汝を知り、汝が胎を出でざりし先に、汝を聖め汝をたてて万国の予言者とせり」という言葉があり、「高価なる真珠」アブラハムの書第三章二十三節には「これらの者をわが統治者となさん。……アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり」という言葉がある。

人間は「先在」の状態に於ても現在と同じように「各々同等ではなかった」。此世に属する人間は太初に於て同じ状態で出発したかも

知れない（モルモン経、アルマ書三〇五参照）。人間の霊はすべて太初に罪のないものであった（「教義と聖約」九十三〇三十八参照）、しかし無量の長い時が経過するうちに、この「不死の霊体」を持った「人間の霊」は、その「自由意志」を使うことによって一層の「英知」を具え、一層誠命に忠実になる者と、「真理なる光明」を受け入れず「真理なる光明」に背く者とを生ずるに至った。

神はモーセを通して「いと高き者は人の子らを分け、諸国民にその嗣業を与えられたとき、イスラエルの子らの数に照らしてもろもろの民の境を定め」（申命記三十二〇八参照）と宣うている。これによって、主が諸々の国民にその嗣業をお与えになった遙かなる昔に、イスラエルの子らの数がすでに定まっており、その住むべき処の境もきまっていたことが明らかである。それであるから、「先在の状態」（前の世）における霊界には、人間の霊にすでに区分があって、イスラエルの子らとして任命される者たちは、他から分けられて特別な嗣業を与えられるように備えられていたと言うことができる（「救いの教義」第一巻五十八、五十九頁参照）。

六、「先在」の状態が「現在」の状態に影響している

ルシェルと三分の一の天群とは、「父なる神」の「救いの計画」を受け入れずに謀叛をして、その第一の位（おるべき所）を捨て去ったから（「高価なる真珠」三〇二十七・二十八、ユダ書六参照）、この地上へ生れて来て「死ぬべき身」を受けた者（われわれを含めて）は、すべてその第一の位を保った者たちである。

人間は「先在」の状態（前の世）に於て「父なる神」の前に在って直接導きと恵みを受けていたが、「現在」の状態（もしくは第二の位）では「死ぬべき身」を持ちながら、信仰をもって歩み「自由意志」の賜を使って、「何にてもあれ、主なる彼らの神が命じたまわんすべてのことを」自分が「為すや否や」（「高価なる真珠」アブラハムの書三〇二十五参照）を試み、一つ一つ学んで成長することを「父なる神」は欲したもうた。それであるから、「父なる神」は人間からその「先在」の状態に関する知識をことごとく取り去ってこの「現在」の状態で無力な幼児として新しく第一歩から踏み出させたもうた。従って人間は此世に生れて来る時に、「先在」の状態で自分がいかなる事を経験しいかに進歩したかというような知識を「前の世」へ置いて来た。創世の時に万物を創りたもうた「神の御子」でさえも、此世へ来ては「最初に完きを受けずして恩恵に恩恵を加えられ」たもうた（「教義と聖約」九十三〇十二、ルカ伝二〇五十二参照）。

しかしながら、人間は「先在」の状態に関する記憶を失ったにもかかわらず、「前の世」なる霊界での生活は、「死ぬべき身」を持った現在の生活をしているわれわれ人間の気質欲望、知性などに大きな影響を与えている。現世に於ける環境そのほか多くの原因が人間の将来と進歩に大きな力を及ぼすことは言うまでもないが、前の世に於て人間が無量の長い時を経て発達させた「霊の特性」が、現世の生活に重要な役割を持っていることを見失ってはならない（エレミヤ書一〇五、アブラハムの書三〇二十三参照）。

すべての人間は「父なる神」から生れた「神の子ら」であり、「父なる神」は人間を片より見たもう御方でないから、皮膚の色容貌生れた環境育ちなどにかかわりなく、すべての人間に対し一切平等に慈愛を垂れたもう。現世

〈一九二頁につづく〉

セオドル・M・バートン

フランクリン・D・リチャーズ

ナサン・エルドン・ターナー

教会は三人の十二使徒会補助を任命する

ソルトレーク市で開かれた第一三〇回の教会の半年毎の大会の最も重要な事項は三人の十二使徒会補助の任命であった。

この新しい役に召された三人は次の通りである。

カナダ、アルバータのカルガリ、ステーキ部のナサン、エルドン、ターナー部長、有名な市民の指導者であり石油会社の支配人である。

西北部ステート伝道部のフランクリン・D・リチャーズ部長、永年の間ソルト・レーク市の検事を務め又合衆国家屋管理部の理事を務めた。

セオドル・M・バートン博士、最近西ドイツ伝道部長を解任された、ユタ州ローガン市のユタ・ステイト大学の化学教授である。

躍進する教会の要求に答えて教会幹部の数を増加すべく召された三人の新役員の氏名は土曜日の朝の大会に於てデビッド・O・マッケイ大管長によって読みあげられた。発表の数分後において彼らは教会幹部支持により、この大会において新しい役に支持されたのである。

支持についてマッケイ大管長は新しい、十二使徒補助を一人づつ呼んで大会在席の会衆に紹介し、それから彼らはタベナックルの上段幹部席に着席したのである。

ソルトレーク神殿で土曜日の午後に大管長会、十二使徒会、十二使徒会補助会の特別集会が開かれターナー長老、リチャーズ長老及びバートン長老はマッケイ大管長によって新しい役に按手任命された。

この三人の新しい追加によって十二使徒会補助会の数は十一人となった。

■ 大会は東京・甲府・仙台の三カ所において行なわれた。

東中央地方部
今年最初の地方部大会開く

■ 3月11～12日

大会は東京・甲府・仙台の三ヵ所において行なわれた。今年からステーキ部大会と同じように、地方部大会は年に四回開かれることになった。昨年末この通達が伝道部長会からなされた時、東中央地方部長会では、従来より二回ふえた大会が、地方部の全ての会員にとって、出来得る限り、公平な恵みの機会となるように、熱心な討議がかわされた。

その結果、広大な地域を管理区域として持つ当地方部では年に二回は大会を地区ごとに開き旅費の負担・旅行時間による障害など、遠かく地の支部の会員が持つ困難をへらし、この恵みの機会を、誰でも受けることが出来るように計画されたのである。

この地区毎の大会は次のようにして開かれることになった。

東京・横浜・群馬を第一地区
甲府・松本を第二地区
仙台・山形・新潟を第三地区

として、第二・第三の地区ではそれぞれの地区内の支部が交互に大会開催地となるように計画された。

このような大会計画が作られたのは当地方部が、他の地方部と違って、地方部長会という組織が完全に日本人によって構成されており、そのもとに、地方部評議員（現在は三名）が地方部役員として、活動しておるので、地方部長会と地方部評議員が三ヵ所に分れて管理することが、可能になったためである。

この地区ごとの大会によってもたらされる利益を、東中央地方部長会は、先にあげたように、遠かく地の会員が大会に参加するための幾多の困難な点を解消するだけではなく、大会参加人員が大きくなればなるほど言われてきた―会員相互の親睦や交友が薄くなっていく―この点を解決するためにも、よい機会となるだろうと発表したのである。

◇◇◇◇◇◇◇

大会は予定通り、三月十一・十二日の両日に三ヵ所（東京・甲府・仙台）に分れて開かれた。この東中央地方部初めての地区ごとの大会が、予想された通りのよい結果をもたらしたかどうか。これから、三ヵ所の大会に、出席した。聖徒の道編集部員の取材から、うかがってみましょう。

○ 第一地区　（会場　東京）

第一地区（京浜地区と群馬支部）では、十一日午後七時からエビス区民会館でMIA主

催による「金と緑の舞踊会」が行われ各支部よりすばらしいデモンストレーションなど披露され、お互に楽しい春の夕べを満喫したのである。

翌、十日二には会場を銀座ガスホールに移し午前九時より神権会、扶助協会が開かれ、十時半、田中健治兄弟の司会（管理者は今井地方部長）で開会され、各支部長からすばらしいお話があり今大会のテーマの意義が強調された。午後からは証詞会が行われ、最後に今井地方部長は、祝福された今大会の意義と成果を語り、

『……福音を恥とせず喜びとし、信仰と証詞を強め神の王国建設の為に準備し、誠心誠意努力するよう』強調され今大会を結ばれた。

なお、午後四時より、各支部相互の親睦を計る目的で表参道の当教会堂で東京北支部の計画による「ファイアサイド」の会が催され、各支部の自慢話に盛られた終始なごやかな雰囲気のうち無事閉会。次の六月大会の再会を共に誓った。

—S記—

○家族のような、なごやかさで
開かれた第二地区（甲府）大会

三月十一日、この日は関東・東北にわたってうら暖い、好い天気であった。

午後四時過ぎ、ぶどうと景勝の地、甲府駅前に四人のアメリカ人とおばあさんやら学生などをまじえた一団が、にぎやかに親しげに握手をし挨拶をかわしていた。

ちようど地方部評議員の田中英男兄弟と地方部書記の福田真兄弟が東京より到着しついで松本から約十五人にわたる会員、求道者と二人の宣教師が到着し、甲府支部の姉妹、宣教師の、出迎えを受けていたのである。

この一群はその後、甲府支部の最初の会員既に会員生活五十五年という、野々垣兄弟のお宅によばれ、暖い兄弟愛のこもったおいしい卵丼をいただいた。

野々垣兄弟のお宅は、甲府市の目抜きの場所にあり、野々垣兄弟所有の商店の二階で広いフロアを持った隣りのお座敷で、ゆっくりとくつろぎ旅からの疲れをいやすとともに、楽しい歓談のひとときを過した。

MIA大会は甲府支部の教会堂で、甲府支部の会員の手になる美しく装飾された会場で開かれた。

甲府支部の教会堂は木造モルタル塗りで甲府支部の土地を借りて建てられていた一銀行の仮営業所が本建築完成とともに引き払ったその後を、教会が買いとったものである。

前支部長のガンダーソン長老や、甲府支部の会員の協力によって、その建物の部内は美しく改造され、三つのクラスルームと約七、八十人収容出来る広さのホールを持ち、その他に事務室、図書室、宣教師の寝室二間を持っているのである。

甲府・松本のMIA大会は約三十五人の参加で開かれ、フォークダンスや、社交ダンスの楽しいプログラムがくりひろげられた。

このMIA大会は、残念ながら、男性のパートナが不足していたが、おとしよりと言っては叱られるかもしれないが、若い人たちのお母さんのような姉妹たちも交わってなごやかに開かれたところに特徴をみつけることが出来るだろう。

MIA大会終了後、松本からやって来た人たちの為に、甲府の支部の会員は協力してこの遠方からのお客さんを、それぞれ、自宅に招いて一夜の宿を提供したのであった。

翌十二日（日）大会にふさわしい美しい朝を迎えて甲府支部の教会堂で、神権会、扶助協会が開かれた。扶助協会は地方部評諸員の田中英男兄弟管理のもとに開かれ、神権会はテッド・プライス第一副伝道部長の管理のもに開かれた。

同十時半から一般大会が行なわれた、

一般大会は福田真兄弟の司会で現在非専任宣教師をしている甲府支部の雨宮たん姉妹の伝道の大切なこと、勇気を持って伝道しようと呼びかけ、松本支部の吉田道乃姉妹の強い福音に対する確信、第二副地方部長の鈴木正三兄弟のテーマにもとずく会員の一人一人の伝道強調、テッドプライス副伝道部長の教会への奉仕に対する強い証詞がのべられ、会場に集った人たちの顔にも神の御霊の導きが、感じられる内に閉会した。

この後午後十二時十五分から田中兄弟司会のもと証会が開かれ、甲府、松本の両支部の兄弟、妹姉が次々と立って、心からなる証を述べた、

この証会で、プライス副伝道部長は奥さんのプライス姉妹が病気のため、二人の子供を連れていらっしゃったが、この小さいプライス兄弟（九才）、プライス姉妹（八才）がお父さんのプライス兄弟の通訳によって証を述べられました。

モルモンの家族として育った子供が、主の御霊によって、幼くても、主の御心を知っている様を目の前にみて、この証を聞いた人々は皆心の中に、天のお父さまの深い愛を感じた。かくて証会も無事に終了し、松本、甲府のこの大会を記念して写真を取り、甲府支部の扶助協会員の手になる、いなり寿司を皆がテーブルをかこんでいただいた。

次の文はそれぞれ、この大会に出席した人たちの一言感想文である。

私は会員となってまだ本当に、日のあさい者でして教会のすべてのことは、まだなかなかわかっておりませんが、ただ神様の福音にひかれてこの大会に出席しました。松本とは、離れているこの地において、始めてお会いする兄弟、姉妹でありながらも肉身にも勝るゆたかな愛情に結ばれていることを発見して何か世の中が、あかるくなって喜びが湧いてきます。世の中が広くなったように思い、感謝でいっぱいです。

そしてもっと早くこの道を知っていなかったことを残念に思いました。

遠山ちとせ（松本支部）

まずは天候に恵まれ、素晴しい大会でした。特に証会の時が印象強く残っています。プライス長老のお子さんの証詞は、簡単でしたが素朴で、感謝の念をあらわしていてとても気持のよいものでした。よい建物にめぐまれてうらやましく思われました。

深沢兄弟（松本支部）二十八才

○第三地区（仙台会場）

第三地区（新潟、山形、仙台）大会は本部からアンドラス伝道部長夫妻をはじめ、評議員の渡部正雄兄弟、地方部第一副部長の大塚昌治兄弟を迎え、仙台駅前日乃出会館八階ホールで行なわれた。十一日夜はＭＩＡ大会、十二日は午前九時から神権会、扶助協会両大会。同十時半から一般大会が行なわれた。

一般大会は渡部兄弟の司会で、テーマ「心から柔和に、心から真面目に出で行きて、イエス・キリストと、かれが十字架にかかりしことを宣べよ。しかして、他人とその持てる信仰または信仰体系のために論争することな

くして、確固たる方針をつづけよ。われこのことを誡命によりていう。すべてこれを守らざるものは、その頭上に迫害を招くべし、されどこれを守るものは常に聖霊に満たされん。われこれを予言として宣言す。ジョセフ・スミス」のもとに、鈴木五郎（山形）、福田濃（仙台）、大塚副地方部長の各兄弟、それにアンドラス姉妹と伝道部長が、約八十人の会員、求道者を前に話した。いまの伝道方針は個々に対するより家族への伝道に重点がおかれており、会員の家族ぐるみ伝道に対する心がまえが主として強調されたがとくに大塚昌治兄弟は、マタイ伝十九章十六節から二十二節までを引いて、ギリギリの瞬間にその人の信仰の力がより明確にされるとして信仰のもち方にふれ、ルカ伝十一章二十四～二十六節のたとえ話から、会員の心の中に、追い出された悪霊が別の悪霊をひきつれて住みつく可能性が多分にあると警告した。

ついで午後零時半から福田濃兄弟の司会であかし会が開かれ、兄弟、姉妹たちが立って、自分の心からのあかしを述べた。このあと伝道部長夫妻をかこんで昼食会に移りやわらいだふんい気のうちに、同三時半過ぎ散会した。

なお昼食会の席上、伝道部長は

一、日本人の専任宣教師をこんごどしどしふやしたい。また非任宣教師も現在の五十人を百人程度にしたい。

一、新潟、山形、仙台を除いた東北の他県に支部を設ける考えをもっているが、いつどこに置くかはまだきめていない。

ことを明らかにした。（遠藤）

支部だより

―東京中央支部―

初春に送る二つの話題

◆モルモンの新家庭誕生　現支部長夫妻の後を次いで、去る二月十一日、広尾町のミッションホームで、原靖之兄弟と今井富子姉妹がめでたく結ばれ、力強くモルモンの家庭建設にスタートした。御両人共、当支部きっての立派な体格と風貌の持主であり私達後輩の良き手本になってくださるだろう。

◆モルモン二世丸山和子と命名　丸山支部長と姉妹の間にこの十二月めでたく、女性のモルモン二世が誕生、話題をさらっていたが、三月第一安息日の五日お父さんの手によって、祝福の儀が取り行われた。

参席した兄弟姉妹お友達は皆、その幸福そうな親子を、静かに見守り、アブラハムの祝福から続く人類の繁栄を目の当りに見ることができたわけである。

◆各補助組織の役員変る

三月の始めの各会から次のメンバーで行われています。

◎日曜学校管理会

会長　原靖之兄弟
第一副会長　山島建嗣兄弟
第二副会長　青木喜久雄兄弟
書記　友定紀久代姉妹

◎M・I・A

YMMIA会長　金子椎俊兄弟
YMMIA副会長　内藤忠利兄弟
YWMIA会長　南城綺子姉妹
YWMIA副会長　大竹典子姉妹
書記　奥山芳美兄弟

復活祭に憶う

宏芸　宏（編集部員）

市販されている幾種類もの日記帳に、復活祭という行事名を四月二日欄に記載してあるのをみて、この行事について理解する人の少ない現状を心から悲しく思うと同時に、恵みによって、はっきりとその意義を教えられた者の責任を痛感した次第です。

イエスという人物が十字架の上で殺され、墓の中に埋められましたが、三日後再びよみがえられた事実を記念する日、これが復活祭であります。

イエスの復活が私たちに関係なければ記念しないでしょう。実にイエスが人間のキリスト（救主）になられたのはこの復活が成就されたからでありますが、単に復活はイエス・キリスト御自身のために喜ぶべき記念日ではなくて、キリスト信仰の根本であります。即ちイエス・キリストの復活は、孤立した事件でなくて、イエスの生涯はこの方向に向って調和したメッセージを物語っています。

「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」偉大な青年イエスは、三十才の時、僅か数名を召して、神の御意による伝道を開始されましたが、それは、絶望のどん底にある者や、長い年月病床に臥した人たちにも、彼が触れたり彼を見ることによって希望に満ちた前途という平安と慰めを与えたのでした。

イエスは伝道を通じて、現世における生活上の困難を無視したり、悩む者を敬遠しないで、日常のささいな問題にも関心を持たれる慈悲深い父としての神を人々に教えられたのです。

イエスの説かれた罪や、永遠の生命の教えは、当時の長老、祭司たちの頑固な因襲的なものを切断したかに見えましたが、彼らはイエスの人気が一般群衆の間に高まることは反って自分たちの名声と力が失なわれる恐れがあると警戒し、イエスを除こうと至極もっともらしい口実を探しました。

しかし彼らの悪巧みが片端から失敗し、遂にイエスを殺すことが目的達成の唯一の方法と策略を廻らしたが、思いがけぬ援助者を発見しました。それは十二使徒の一人イスカリオテのユダでした。

「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」ヨハネ伝十六〇三三

この不思議な言葉を其の夜一人の弟子に裏切られ、他の者に偽られ、残酷にも鞭うたれ嘲笑され、次々と愚弄されながら、引廻され最後にはナザレのイエス、ユダヤの王と記さ

れた十字架にかけられ、息をひきとる瞬間まで、威厳のある平安な態度を保って、彼を十字架につけた独善的祭司を憤らせた者が発したのです。すなわち彼を支持し助ける神の力に対してイエスの確固たる信仰は最後まで微動だにしなかったのです。

やがて「父よ我が霊を御手に委ぬ」との言葉が彼の口から出されて息が絶えた。

しかしそれは終りではありませんでした。偉大な模範イエスに従って生きた青年たちに単なる一時的の情熱でない、不滅と永遠性を知らせる大事件が起ったのであります。

「主は実に甦り給えり」

弟子たちは師なるイエス・キリストに再び逢ったのです。復活体を持つキリストを見たのであります。話しました。以前に知っていた通りの完全な人でありました。トマスは手と足にある釘跡を示されましたが、それに触れるまでもなく実際に生きていらっしゃるイエスであることを知りましたが、その生きていることはある点で普通とは異っていたので「わが主よ、わが神よ。」と叫んだと思います。

実にイエス・キリストは世に勝たれたのであります。それは神の意志に反する罪、病気や死等に勝ったことを意味するのです。完全な人間の象徴として、イエスの心は常に神の意志と一致されていました。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」マタイ伝五〇四八

キリストは、神が人に対して冷淡でなく、人間の罪にも顔をしかめず、向上し完全になるよう期待していらっゃることを人々に示し私たちの重荷を負い、罪を自身が背負って、彼の霊を与え、私たちが神やイエス・キリストに逢うための具体的な方法を提供してくださったのであります。

キリストが復活された通り、私たちも皆復活致します。私たちの生命は永遠不滅となりました。もし私たちが心の底から、イエス・キリストによって示された永遠の生命の真意を知り、死の恐怖と淋しさが除かれるなら、天父の意志に一致した行為を起させる御霊が自分にもあることを知られるでしょう。

主は実に生き給うとの証詞を申上げて、皆様の上に神様の御恵が豊にありますよう祈りすべてをイエス・キリストの名前によって致しました。

〈求道者のためのよみもの〉

ユタ物語（完）

リーヴァイ・エドガ・ヤング
（七十人会最高評議員会々長）

○社交及び知育

ユタの人民は常に知育に強い関心を示し、広く知識を求めた。ユタからのヨーロッパへの留学はその人口密度による時は合衆国一だと言われたいる。その結果、ヨーロッパの中心地の最上の思想が持ち帰られて民の知育に役立ったである。今日、ユタの知的水準の高いゆえんがここにあるのである。最初の劇場は一八五〇年に開かれ、一八五三年にダンスと演劇の為に、〝旧社交会館〟が建てられた。シェクスピアの作品が上演され数多く成功したのである。一八六二年に有名なブリガム・ヤング劇場が完成し、この早期時代に多くの偉大な俳優たちが、ここに出演する為に広原を越えて来たのである。演劇はユタの人々によって、世界的な知的進歩の大きな事実と見なされて来たので劇場は常に高く評価された。マウド・アダムスはユタの舞台でその花々しい生涯をスタートし、ジュリヤ・ディーンは十カ月間満員の内に首尾よくシェクスピアを上演したのであった。ブースやバーレットがシェクスピアの演芸目録に登上し、コルドック、パティ、メルバ、イルヴインその他の人たちへの拍手の為に旧い建物は鳴響いたのである。

文学方面に於てユタは、或作家たちを出した。そのリストの筆頭はオルソン・F・ホイットニーである。ホイットニー氏は〝ユタの歴史〟の作者でその詩作の内で〝開拓者たち〟は恐らく最上であろう。C・C・グッドウィン判事は執筆家及び新聞記者としてホイットニー氏とその誉れを共にした。何となれば永年の間州でも主要な雑誌〝ソルト・レーク・トリビューン〟の編集員であったからである。彼の〝コムストック・クラブ〟は西部の早期の黄金時代を素晴らしく画き、又彼の〝神聖なる光〟は神のその子供たちへの心づかいを示す文学上の傑出した小品である。グッドウィン判事が〝ユタの開拓者たち〟と題名した小論文の中で描写した程よく開拓精神を描いた作者は恐らくいないであろう。

我々の最も偉大な詩人はサラ・カルミカエルである。彼の詩〝黄金の起原〟はブライアント全集の中にあり〝リンカーンの死の頌詩〟はホイットマンの〝隊長、おお我が隊長〟と同様に広く読まれている。アルフレッド・ランボーンはある珍らいし詩を書いた。そして彼の散文〝我等の内海〟はよく自然を描写してその心にふれソローの作を忍ばせる。ネッド・ロイルは〝スクオー・マン〟〝静かなる呼声〟及び〝永遠の闘争〟などを国民に与えたが或アメリカの批評家は〝すべての人〟以来の最大なる道徳作品であると評している。

ユタは音楽に於て広く知られている。早く一八六六年に既にソルトレーク市の人たちは彼らの劇場に於て一週間に亘ってヘンデルの〝メサイヤ〟を聞いたのである。開拓時代

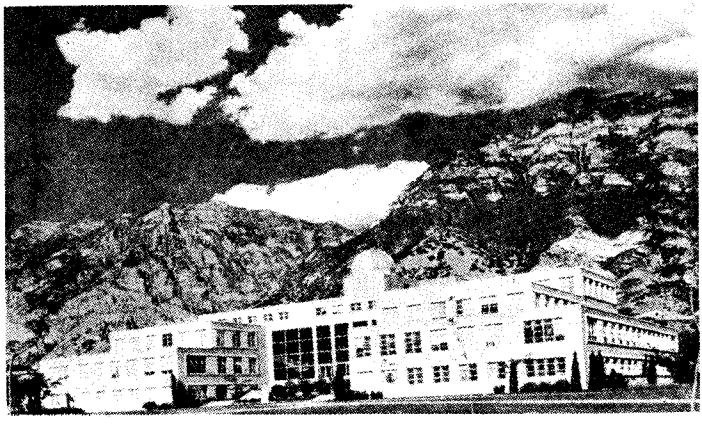
にはヨーロッパの中心地で学んだ多くの音楽家たちがいたのである。実際においてユタの開拓者たちはブラスバンドに合せて進軍したのである。そして一八五十年代早々にかってウエスト・ポイントでバンドマスターを務めたイタリー人のパロがソルトレークでバンドを組織したのである。偉大なタベナクルのオルガンが建てられると世界的に有名な歌手、パティ、メルバその他の人々が来て、その伴奏により歌ったのである。ユタは多くの子供たちを音楽や芸術を学ぶ為に海外に送ってきたのである。そして音楽の中心地として注目されるようになったのである。芸術界においてはユタの彫刻家シラス・E・ダリンは国際的な名声を博したのである。貴方はニューヨーク、シラキュースのクリント広場に彼が刻んだ兵士と水兵の記念碑が建っているのを見るであろう。彼の〝聖パウロ〟はボストン市によって買われ、また彼の〝医す人〟はフィラデルフィヤのフェヤマウント公園に建っている。M・M・ヤングは彫刻家として全国民に知られた。彼の作った美しいかもめの碑はソルトレーク市に建っており彼は最近パナマ博覧会の芸術委員会の委員の一人に選出された。

○ユタにおける学校

教育程度においてユタは合衆国一である。ユタの教育水準は高く一九〇四年のセント・ルイスの博覧会においてソルトレーク市の小学校は第一位となって金メダルを受取りまた州普通学校も金メタルを獲得した。最高の報賞は、ユタ、オグデンの、州立盲聾唖学校が授領した。

今日、公立学校で九万五千人の子供たちが教育を受けている。州内に十一万五千人の学童がおるけれど彼等の多くが私立学校に通っているのである。そこには七百の学校二千六百三十七人の先生がおるのである。学校建物の価格は八百万弗で学校制度の歳出は四百弗で一学童り三十五弗となっている。ユタのすべての市や町に美しい校舎が建っており、学校は州内に普及している他の教育機関と共に民の教育水準を高めているのである。ユタには好い学校、独特な教会堂、大鉄道、大熔鉱炉及び鉱坑並に美しい市々町々がある素晴らしい新聞や雑誌が出版されている。最も旧い新聞〝デゼレット・ニュース〟は一八五〇年六月に発刊されたミズーリ河以西で最初の新聞である。州は急速に生長しつつあり、民は共同の福祉と繁栄の為に一致協力して建設に邁進しているのである。砂漠を曠う仕事は困難であった。多くの試練や苦難は克服され、今日、輝かしい民の業績は各方面に見られるのである。

（完）



カール・F・アイリング化学館

勤労奉仕宣教師の経験

ユージェヌ・T・大島（宣教師）

<中央筆者>

「真の喜びと幸福は他人に幸福をつけ加えることによって生ずる、自己を忘れよ、そうすれば此世と次の世との喜びは必らず君に来るであろう」とヒーバー・J・グラント大管長の言葉の中に言ってあります。これはまた、「奉仕」という一語に尽きるでありましょう。私はこの言葉が全く本当であるということがわかります。それは私がかって奉仕を通して喜びと幸福を経験したことがあるからです。今から四年前、千九百五十六年十一月の五日に、私はハワイ島オアフ、ライエにあるハワイの教会大学を建てる助けをするために、勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）として二年間奉仕をするように召され、このやり甲斐のある働きのために私の時間と才能と生活とを捧げることになりました。私がこの召しを受けたとき、勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）として奉仕をすることは大きな特権であり、また好い機会であると感じましたから、私はほとんどちゅうちょせずにその召しに応じました。

私がそれまでかって感じたことのない喜びと幸福と満足とを経験したのは、そこで勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）として働いていた時のことでした。毎日奉仕の働きをして、私たちが、善いものを今建てており文字通りに神の僕べであることを知るのはすばらしいことです。また朝に、兄弟たちがみな仕事にとりかかる前仕事着をつけて集合し讃美歌を唱った後、共にひざまずいて祈りを捧げ、これまでに受けた祝福を天父に感謝すると共に、今日もいつも助けと導きとお守りとがあるように願い求める姿を見るのはすばらしいことです。そのグループの一人となって、その中にある良い精神を経験するのはすばらしいことです。ここにはちがった人種ちがった年齢、ちがった場所から召された人々がいても、ひとつの群の中に集って同じ目的のために喜んで働いていることに目を留めるのはすばらしいことです。私たちが心の中に同じ目標と同じ目的とをもって、ひとえに神の栄光をあらわすために熱心に皆奉仕をしていることを心の中に知りつつ毎日一生けんめい働くのはすばらしいことです。

教会は、勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）の捧げる無料の奉仕によって多額の金を節約しました。それにもかかわらずこれは、勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッシ

ョナリー）を得る主な目的ではありませんでした。主な目的というのは、働く人々の中に人格をつくり上げ、また同時にイエス・キリストの福音をひろめることでありました。この勤労奉仕の働きが終ってから、勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）の働きに来る前は証詞が弱かったけれども、奉仕の期間が終るころになって証詞が強くなった兄弟たちに対して、また勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）とその無料奉仕との話、および、ハワイの教会大学が勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）たちの力で建った物語りがこれからいついつまでも常に語り草となる話を聞いてから非教会員たちが、

＜おっこちないようにね＞

教会に興味を持つようになったことに対してこの勤労奉仕の働きの目的が充分達せられたことが明らかになりました。

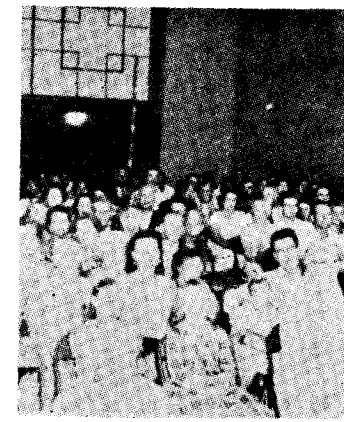
私はこの勤労奉仕の働きをしている時にサタンの誘惑が強かったことを認めなくてはなりません。また、その仕事が辛いために多くの者が脱落したことを認めねばなりません。しかし、最後まで堪えた者たちには何らの悔いるところがなく、しかもその奉仕に対しいろいろの方法で祝福が与えられております。

千九百五十八年十二月十七日に行われた献堂式の時に、私たちの心に満ち充ちた喜びと幸福と満足とを言葉で言い表わすことは、困難であります。予言者デビド・O・マッケイ大管長が立ち上って献堂の祈りを捧げるのを目のあたりに見、その言葉を耳にするのをいかに幸福に感じたかを言い表わすことは困難であります。また同時に、今日建っている通りの美しい建物を建てるときに経験したことを考えて、いかに幸福に感じたかを言い表わすことは困難であります。建築家にとってはこれらの建物は現実になった夢であり、ライエの人々および始めにこの仕事の着手された様を見たすべての人々にとってこれらの建物は奇蹟であり、またこれらの建物を建てた者

＜気の合った同志＞

たちである勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）であった私たちにとって、これらの建物は今一つの記念碑としてまた永遠に生きて霊感を与えるものとして建って居ります。私は勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）として働いたときに得たいろいろな経験をこの世のどんなものとも取り換えようとは思いません、またどんなに金を積んできても売ろうとは思いません。世界中の金を以てしてもこの貴い経験の価には及ばないからであります。私が生きているかぎり、私はこのすばらしい経験を決して忘れません。それは、私が一生のうち最も大きな喜びと幸福と満足とを得たのが私が勤労奉仕宣教師（レ

ーバー・ミッショナリー）として働いたときであり、私が長い間待ち望んでいた福音の心からなる強い証詞を得たのも私が勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）ととして働いたときであり、また日本へ来て改宗者獲得の働きをするために奉仕をしたいという願いを起したのも私が勤労奉仕宣教師（レーバー・ミッショナリー）として働いたときのことであるからであります。また、私は今日本へきて二年半の期間を以て改宗者獲得の任務に奉仕しておりますから、私は非常に幸福であります。それは私が今一度奉仕をして、今一度この奉仕ということを通して与えられる喜びと幸福とを現在経験しているからであります。



＜私たちの聖餐会＞

〈一七六頁伝道部長メッセージよりつづく〉から、家族の人たち全部と集りをもつように尽力することを提案します。あなたは、求道者の家族の人にもレッスンを聞かせるという取り極めをするよう求道者にたのむことによって、これを実行することができます。例えば、あなたは最初の集りの終りに次のように言うこともできるでしょう。

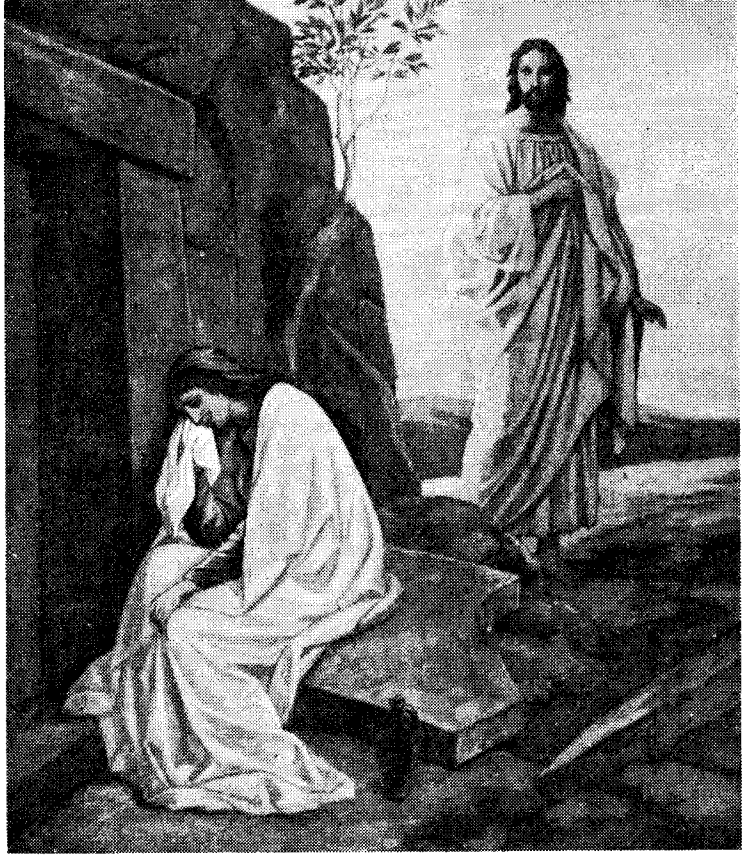
「中村君、僕たちが今勉強していることは、君にはもちろん君の家の人にとっても一番大切なことだということにきっと同意してくれるね。これから僕たちが考えを言い合うときに、君の家の人たちも一しょに入ってもらえないだろうか」と。

家の人が皆出る集りは、その家族の住んでいる家で開くのが一番よろしい。それですから、以来あなたは求道者の家族も一しょに集りを開くよう取り極めをする努力をすべきであります。

当教会はダニエルとイザヤの予言に応じて前進しておりますから、間もなく全地に充ちるにちがいありません。マッケイ大管長は当教会の会員のこらずに向い、宣教師となって世の人々を教会に入らせもってこの偉大な神国建設の働きに力を添えるようにたのんでおられます。「福音の回復を伝える言葉」による手引きを使うことによりまた家族全体に道を伝えることによって、あなたもまた一人だけでなく多くの人々を毎年教会へ入らせることができます。

ここに私は、北部極東伝道部に属する教会員の一人一人が、今起ち立って、いたるところにある大きな機会を利用し、神国建設の業を活潑に行うよう切に勧める次第であります。主は主の御業のために働くあなたを祝福なさるにちがいありません。

〈一八〇頁モルモンの教義よりつづく〉に於ける人間の環境、生れつき等に不同があるのは、人間が「先在」の状態に於て「各々同等ではなかった」ことによる（「高価なる真珠」アブラハムの書三〇十八―二十三参照）。「先在」の状態（前の世）に於てすべての律法に忠実であった者は、現世に於て大いなる祝福を受け、律法を少ししか守らなかった者は現世に於て少ししか祝福を受けていない（「救いの教義」第一巻五十九―六十一頁参照）。



イースターとマグダラのマリヤ

イエス「マリヤよ」と言い給うマリヤ振りかえりて「ラボニ」と言う

大塚昌治
（編集長）

私は毎年イースターの朝には日の出前に早起きをすることにしている。そしてこの朝にやはり早起して主イエス・キリストの墓に行ったマグダラのマリヤと他の数人の女性とペテロとヨハネについてまたこの日におきた出来ごとについて想い出すことにしている。

数年前高崎支部でこの早起きを支部でやったことがあった。高崎の観音山に登りイースタープログラムをやったが、桜がとても素晴しく咲いていてよい青空の集会場であった。私たちが歌うイースターの讃美歌は朝の清らかな空気に流れて行き丁度東の空から大陽が登り始める頃私は次のような話をしたのを記憶している。

「一週の始めの日朝まだ暗いうちにマグダラのマリヤは私たちと同じように他の女性たちと一緒に主の墓に行きました。当時の死者の礼に従ってイエスの死体に香油と香料をぬろうとして出かけて行ったのです。墓の入口には大きな石があるがどうやってそれを除けさせる事が出来るだろうか。彼女たちの心配の種はそれだった。だが墓についてみると何者かが石を除けていた。それどころか主の死体もそこにはなかったのです。なにか恐ろしい出来事があったにちがいない。彼女たちは恐怖と不安にかられました。マグダラのマリヤだけが丘を走りおりて行きました。イエスの弟子に真相を伝えに走ったのです。しかし弟子たちは彼女の言葉を始めは信じることは出来なかった。ルカもマルコもそう書いています。『使徒たちは其の言をたわごとと思いて信ぜず』（ルカ伝二四・一一）と。マリヤの必死な顔を叫びとに、ペテロとヨハネがやっと腰をあげました。

三人はふたたび走りはじめました。その頃やっと今のように空はあけ始めたのです。若いヨハネはペテロよりもマリヤよりも墓に早くたどりつきかがみこんで布の置いてある墓をのぞきこみましたがペテロの来るまで中に入らずにまっておりました。

マリヤの言葉は本当でした。布は他に捨てられ、大きな石は横にころがっておりました。イエスの顔をつつんでいた手拭が入口にたたんでおいてあるだけでした。

ペテロもヨハネも他の女性たちも帰って行ってもマグダラのマリヤだけは帰ろうとはしなかった。静かな朝にマリヤのすすり泣く声がきこえて来ます。キリストが復活したのを気づかづにただかなしく何も考えずに泣いていました。」

このマリヤの前にイエス・キリストは復活した最初のすがたを現らわすわけであるが、あまりに美しくあまりに劇的でヨハネ以上に筆には現わせないし、言葉でも表現出来ないので次にその場面をヨハネ伝章十二節から十六節を次に引用しよう。

「イエスのしかばねの置かれしところに、白き衣をきたる二人の御使、こうべの方にひとり足の方にひとり坐しいたり。而してマリヤに言う『おんなよ何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰かわが主を取去れりいづこに置きしか我しらづ』かく言いて後にふりかえればイエスの立ちおりたもうを見るされどイエスたるを知らづイエス言いたもう『おんなよ、何ぞ泣く誰をたづぬるか』マリヤは園守ならんと思いて言う『君よ、汝もし彼を取り去りしならば、いづかに置きしかを告げよ。われ引取るべし』イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤふりかえりて『ラボニ』と言う」

この光景を作家遠藤周作は

「劇的なこの光景をぼくの貧しい筆はとても描写できません。だがみなさんはこの一瞬をとらえた、数々の絵をごらんになったことがあるでしょう。ジョットやズッチョ、ロレンツオ、デイ、クレデイ

<墓における天使と女たち>

もラファエロもこの荘厳な朝のゴルゴタの丘の背景にして『マリヤ……』とよびかけたおぼろげな朝霧の中の人の声、その声を耳にして「ラボニ……」と叫んだマグダラのマリヤの顔をみごと描いているのです。かって『七つの悪霊につかた』女は今、真珠色の朝の光のなかで地上をこえたキリストの最初の姿をみることができたのでした。」と「聖書のなかの女性たち」という最近の著書の中で書いている。

また賀川豊彦もその著書「キリスト教入門」の中で、

「『ラボニ』という言葉は娼婦の言葉である。普通なら『ラビ』(師先生)と呼ぶべきであるが彼女は喜びのあまり覚えず昔の癖を出して『旦那さん』と呼んだのである。……非常に美しい、印象的な光景である」と書いている。

次の詩は八年前のイースターに私が書いたものであるが、マグダラのマリヤの泣いている光景が強烈に私の心をとらえ書かせたものである。

○　○　○　○

一まわりの最初の日
マグラスのマリヤは早起した
主の墓に行く為に――
しかし、主はいない
天使が地震と電光と共に
兵卒をうちたをし　墓石を動かして迎えに来たので
墓と死の勝利者として復活なされたのだ
マリヤよ
ないてはいけない
讃美の歌をささげよ
予言者と主自身の御言葉が
成就されたそのことに

○　○　○　○

一体に聖書に登場して来る女性はいちように悩みや苦しみや悲しみを背負っている。聖書の簡潔な表現はこの事実を「さきに悪しき霊を逐い出され、病をいやされなどせし女たち」(ルカ伝八・二)とはっきりと表現しているが、この聖句は「即ち七つの悪霊のいで

しマグダラのマリヤと呼ばるるマリヤ」とつづいている。

「この七つの悪霊」とはなにを意味するか私にはわかりませんが、イエス・キリストに会う前まではマグダラのマリヤという人は単なる女ではなくすさまじい悪の業火に身をやかれていたものらしい。送っていた生活はおそろしいほど破廉恥な淫乱なものだった。彼女が善をなすときの積極的な態度からみておそらく悪に対しても強かったにちがいない。しかし、罪から罪、肉欲から肉欲の毎日を送っていくうちに虚無の風がつめたく彼女の胸をしめつけ深く自己の生活をかえりみるようになった。そんなとき、キリストが彼女の前に訪れたわけである。なやみ苦しんでいたマリヤから突如悪霊が追い出されそのかわりに光の世界が眼前にひらかれたわけである。自分の生きる路に眼が開けた彼女はひたすら情熱をかけたむけて進み出て行った。

キリストがゴルコダの丘で十字架につけられたときもそのかたわらについて彼女は離れなかった。

「さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。イエスとその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、みよなんじの子なり』また弟子に言い給う『みよなんじの母なり』このときより、その弟子かれを己が家にうけたり」（ヨハネ伝一九・二五～二七）

キリストに愛された弟子それは使徒ヨハネであるが、ゴルゴダの丘のときよりイエスの母マリヤを母として家にまねきいれたことは右の聖句でおわかりになれよう。ところがである。このヨハネがもう一人のマリヤすなわちマグダラのマリヤをも自分の家にうけいれたらどんなものであろう。イエスが復活した体を最初にみせたのはマグダラのマリヤであるところから、イエスが最も愛した女性はマリヤと考えられないだろうか。キリストに愛された弟子ヨハネとキリストに愛されたマグダラのマリヤとの組合せはおかしいものではあるまい。マリヤのように過去をもつ女性を最も幸福にする人は愛の使徒ヨハネをおいて他にはいない。

ヨハネとマリヤのロマンスを私が支部で口にしたときそのほとんどが「まさか」というような顔をしていたが、なにもこれは私のまったくの想像ではなく伝説がそう伝えているのである。げんに大管長デビド・O・マッケイの著書「古代の使徒」の百二十九頁にも次のようなところがあることを最後に記しておこう。

「或る人はマリヤとマグダラのマリヤは、ヨハネと共にエペソに同行し、そこで死去されたと主張しています。伝説もうれしいものであります。と云うのは、ヨハネによって示された、彼の母に対する子としての献身的な愛と共にマグダラのマリヤとの愛をも連想出来ます。その事は他の美しい婦人の言葉にそのままうまく語られていると言ってよろしい。この美しい婦人は、彼の女の良人の母に『汝を棄て汝をはなれて、帰ることを我に促すなかれ、我は汝の往くところに往き、汝の宿るところに宿らん。汝の民は我民、汝の神は我神なり。汝の死ぬる所に我は死にし其処に葬らるべし』（ルツ記一〇十六、十七）

伝道本部だより

バプテスマ

石村時彦	安達よろ志	札幌	
金田千恵子	阿倍野群馬	本田政子	三宮
佐藤一彦	葛城黄麗子	金恒属	〃
川井章	〃	〃	〃
広島	〃	〃	〃
大槻雅美	小林きわ子	金海星	〃
〃	〃	〃	〃
小久保栄子	東京中	李英順	〃
大山芙貴子	〃	宋銀珠	〃
〃	〃	〃	〃
宮田昭宏	成耆植	〃	〃
嶋登	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
瀬川広子	尹友瑾	〃	〃
高木安子	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
島田昭郎	韓瑛洙	〃	〃
石田博	〃	〃	〃
室蘭	ソール中	〃	〃
松山忠雄	鄭根浩	〃	〃
東京北	〃	〃	〃
金鳳	姜暎徳	〃	〃
中村幸子	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
佐藤静子	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃

質問への答 34

一夫多妻制度について

教会はなぜその初期に於て一夫多妻制度を採用したのか

解答者　ジョセフ・フールディング・スミス長老（12使徒会々長）

「質問」

教会は、なぜその初期において〝一夫多妻〟の制度を採用したのか。

「解答」

一夫多妻主義は、一八四三年から一八九〇年までの間二乃至四パーセントの教会の会員の間で行われた。この後、アメリカ合衆国の最高裁判所は憲法を制定して、この慣習を禁じた。憲法に従うことは、教会の根本的な教義である。（教義と聖約九八章五―六節を参照）従って、ウィルフォード・ウッドラフが主よりの導きを願い求めた後、教会はこの制度を廃止した。しかしながら、一夫多妻主義に反する憲法が制定されるずっと前から、教会はこの慣習を禁ずると宣言していたのである。例えば、一八五三年の六月号「聖見者」の中でオルソンプラットは次の如く書いている。

「人の律法により一夫多妻の禁じられている州、地方または国において、二人以上の妻と結婚することは、末日聖徒にとり正しいことであろうか。これに対して、われわれは、否、正しくないと答える。何とならばわれわれは現在ある力――正しいものであるなら――に従うよう命じられているからである。」

今日一夫多妻をしたり、またそれが適切なものであるなどと教える者は速やかに教会より破門されるべき人である。

一夫多妻主義ということは、常に広い説明を必要とする問題であった。一夫多妻の歴史についてよく知らない教会の会員や、多くの非会員たちは、この慣習が末日聖徒の間に取り入れられた動機に関し、誤った考えを持っている。

こうした誤った考え方の中で、最も普通なものは、教会が、女子

の会員が過剰のためにとられた処置であるという考え方である。教会に男子会員より女子会員の方が多いという仮説は現存する説明によっては、決して支持されないものである。これに反し、教会には常に女子会員より男子会員の方が多いと考えられて来ているのである。家族父、母、子供は普通教会に入会するがもちろん多くの未婚の女子が改宗したり、多くの未婚の男性が改宗したりすることもある。一八五〇年から一九四〇年よりの合衆国の調査および教会の記録によると、ユタ州、および教会には常に男性の方が圧倒的に多かつたことを示している。誠に男子増加の割合は、全米の他州よりはるかに大きいのであつた。教会内における出生は一般の人口増加の法則―男性がわずかに多い―に従うものである。一八五三年、女性の数が最高となつたと考えられた時、ユタ州の状態に関する直接的知識をもって著述に専念していたオルソンプラットは、ユタ州では女子が男子よりその数において勝るという意見に反対の意を宣言した。この事実から一夫多妻が採用されたのは女子の会員が多かつたからであるという考え方は実に証拠をもたぬ考え方なのである。

もう一つの誤つた考え方は一夫多妻が教会指導者の放縦によって生じた結果であるということである。これは手もとにある証明によって反駁され得るものである。教会の創設者や初期の指導者たちは英国の一夫一妻主義の制度に下で厳格に育成されたからである。一夫多妻は彼らにとり、不聖な、且つ嫌悪すべき慣習であった。**ジョセフ・スミスは、一夫一妻主義に従わなかったら滅ぼされるであろうという警告を受けるまで、この主義を守るのをちゅうちょしたと言っている。ブリガムヤングは、この教義が啓示された時、二人以上の妻をめとるより、死んだ方がよいと言った。**この他、この教義を教えられた多くの教会の指導者たちも、この慣習の実行に反対の意を表明したのであった。疑いもなく、女の人たちもこの慣習について同様な考えをもっていた。しかしながら、多くの妻は一人の夫との相互関係について高い道徳性を証しているのである。すべての妻は、財産権において平等であったばかりでなく、平等な待遇を受け、すべての子供たちも平等に教育を授けられ、同様に認められていたのである。モルモン教会の一夫多妻主義は、女は男の情欲を充すにすぎないという男性のふしだらな生活を示すものでは決してない。女性は決して一夫多妻を強いられたわけではなかつた。すなわち目を見開いて自主的に行ったのである。すなわち男も女も、ほとんど例外なく、清く、気高い生活を行ったのであった。こうした人たちの子孫は、数多くあり、皆価値ある立派な市民であり、自己の血統をほこりとしている。正直な人たちによつて読まれる末日聖徒の物語は、一夫多妻主義ということが放縦、または情欲の結果でないことを明らかに示しているのである。

一夫多妻の起原に関して維持出来ない見解がある。それは教会が初期の時代を過した開拓地では教会外の男の人たちはしばしば無教育で言葉も行いも粗野であり、上品な女性には全く魅力もない存在であったということが主張されている。教会の改宗者なる女性は、開拓地帯にやって来て教会外のこのような男性と終生を共にするのを恐れまた、このような粗野で下品な父親の影響の下で子供を養育するのをはばかった。彼女たちは一夫多妻をしでもよいからもっと洗練された教会の会員である上品な男性の妻となりたいと望んだのであろうことを実現するために、一夫多妻が設定されたと考え

られると云う説がある。しかし教会に入会した大部分の男性は、卓越せる且つまた、霊的に真理と人生の価値とを探求する人たちであったこのような男の人たちのみ、回復された福音を探求し、教会の会員たちの求める犠牲に直面するよう導かれたのである。このような状態の下で、前に述べた如くモルモン開拓者社会には女性の過剰などでなく教会外に存した下らない粗野な人たちとつれ合う必要もまたなかったのである。

もう一つの推論は人数が少かったので教会はより多くの人数を欲しでこの慣習を実行したため、人口が増加したということである。この考え方は支持されるものではない。何とならば女の人の数は、決しして過剰ではなかったからである。

簡単な真理――唯一の受け入れられるべき真理は、一夫多妻の原則が教会のために、予言者ジョセフ・スミスを通して主より啓示として与えられたということである。これは予言者に伝えられた多くの原則の中の一つであった。すなわち決して人の手に成るものではないのである。この原則は予言者の若干の同僚に初期において伝えられ、また後になり、教会全体に示されたのである。

教会の会員たちは、予言者ジョセフ・スミスの受けた神の召しについて個人個人の証詞をもっていた。彼らは、個々に予言者を通して回復された福音を受け入れ、スミスが一つの義を天より受けると、人々はスミスの予言的召しと力との真実性をすでに確信していたから、その新らしく啓示された教義を受け入れ、それを実行したのである。二人以上の妻をめとることを許された教会の会員たちはそうすることが神の誡命に従うことであると信ずるが故にそうしたのである。この信仰は、一夫多妻ということより生ずる多くの問題にうち勝つ力を与え、且つまた宗教上の信条と慣習の自由の聖なる権利を侵害せんとする敵に対抗する力をも与えたのである。

われわれは、なぜ主が一夫多妻を命令したもうたのか知らない。ある人は一夫多妻を行わせ、それによって生ずる迫害に耐える試練を会員に与えるためであったと考えている。

もう一つの考え方は、前世に関係をもつ教義にその基礎をおくものである。霊界には、より進歩するための方法として肉体を受けるためにこの世に来る機会を待っている数多くの霊がいる。こうした未だ生れざる霊は、出来る限り最良の両親を欲している。一夫多妻を受け入れる人たちは、大体、社会において最も洗練された、上品なタイプの人たちである。価値ある生活を行う男性のみ、二人以上の妻を得ることを許された。そしてまた、信仰あつく純潔な生活を営む女性のみよろこんで一夫多妻の家庭の一員となったのである。(この制度に入るという認可は、教会の大管長によってのみ認められるものであり、そのためには注意深い審査がなされたということを覚える必要がある。)しかしながら、このことも神の示したもうた行いを人間が説明を試みた一例に過ぎないのである。

優生学を研究すると、一夫多妻の子供は肉体的に、また精神的に平均以上であるということを知る。そして幸福な一夫多妻の家庭はその幸福さの程度において一夫一妻主義の家庭より高かったのである。

一夫多妻の原則は、主より啓示として与えられた。それ故に、教会はそれを履行したのである。しかし一夫多妻主義は、主が指示を予言者に与えたもうた時に禁止された。教会は、常に生き、行動し、啓示の中にその存在を有するからである。

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋（十六）

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部　時満ちたる神権時代の開始

第九章　ジョセフ・スミス、モルモン経を授かる——神権の回復

（千八百二十七——千八百二十九年）

十四、ホイットマーの家で（つづき）。

これはバプテスマのヨハネが現われてからちょうど十日後であって、オリヴァ・カウドリが彼（サミュエル・H・スミス）にバプテスマを施した。サミュエルは千八百二十九年四月の始めマンチェスターからハーモニーへオリヴァを伴ってやって来たが、それはオリヴァが予言者と、予言者が持っていると主張していた記録について尋ねるために来た時であって、サミュエルはそのまま春の過ぎるまで兄のジョセフと一しょに暮らした。サミュエル・スミスは以前に家族の者たちほどすぐには予言者の話を信じなかった。それで、ジョセフとオリヴァが神権を授けられてバプテスマを受けたことを納得させることはむしろ困難であった。しかし、多くの質問をかけ、ジョセフとオリヴァから説明を受けた後、サミュエルはただ一人森の中へ退いて人知れず祈りを捧げ、独りで啓示を受けた。彼は今や確信を得たので、バプテスマを受けて「シオンの大事業」の基を定める仕事に従事することを切に願ったのであった。

第十章　モルモン経の見証者

（千八百二十九——千八百三十年）

一、見証者たち召される。　やがて、千八百二十九年六月にモルモン経の飜訳が完成した。今や神のめぐみによって金版を目のあたり見て世の人々に向って証をする三人の

特別な見証者を選ばねばならない。これはニーファイ人の記録をつけた古代の予言者たちが行った予言にかなうことであった。リーハイの息子であるニーファイは次のように予言をした。

「それであるから、その書物は今私の言った男に授けられる時に、世の中の人の目につかないように隠される。従ってその書物を授けられる一人のほかに見証者が神の能力によってこれを見ることができるが、そのほかには誰一人これを見ることができない。そして、この三人はその書物とその中に書いてあることが確実である証をする。このほかにその書物を見ることのできる者は、ただ神のみこころに従って世の人々にその言葉の証拠を立てる数人の者にかぎられる。主なる神の言葉に『真実なる者たちの言葉は、あたかも墓より語る声の如くに語りて証を立つべし』とある」。

マーテン・ハリスが悔い改めてから願ったとき千八百二十九年三月に賜わった啓示（「教義と聖約」第五章）の中にこの言葉がくり返して言ってあるが、マーテンはもし充分神の前にへり下り、強い祈りと真心とを以て彼の高ぶりにうち勝ち、彼がそれまでに犯した過ちを認めるならば、その見証者の一人になるこの大きな特権を与えられるかも知れないと言われた。予言者の書き役オリヴァ・カウドリとデビド・ホイットマーとが、三人の特別な見証者の中の二人になりたいと思ったのは当然なことであった、

モルモン経の飜訳が完成したとき、ジョセフは両親のところへ手紙を出して自分の所へ来てもらいたいと書き送った。両親はこの知らせをパルマイラのマーテン・ハリスのところへ伝えたところ、マーテンはジョセフの両親と一しょに行きたいと言った。そこで、ジョセフから知らせが届いた翌日彼らは旅立った。彼らはホイットマー家に着いた晩モルモン経の原稿を読んで過した。そして彼らは皆非常に喜んだ。彼らはこれまで飜訳の仕事の大きなことを実際に知ってもいなかったし、またその書物にのっていることがはっきり解ってもいなかったのであった。

見証者たちに主の御力が現われる時が来たときに、ホイットマー家に居た少数の人々はいつものように朝早く讃美歌を唱い祈りを捧げた。それが終るとジョセフ・スミスはマーテン・ハリスに近づいて「マーテン・ハリス、汝は罪の赦しを得んために今日神の御前に充分へり下りたり。汝もし為さばオリヴァ・カウドリ、デビッド・ホイットマーの二人と共にかの版を眺めんことは神のみこころなり」と言った。その場に居合せた予言者の母ルシイ・スミスは、「それを思い出すとき、今でも身のひきしまる思いがする壮厳な声でしたよ」と人に言った。これら三人の男は特別な見証者になる特権を与えられるよう熱心に願ったので、ジョセフはこの事を主に申し上げ、「ウリムとトミム」によってかれらの請願をきき届けるという啓示を受けたので

あった。

二、見証者に下つた啓示。「見よ、われ汝らに告ぐ、汝らわが言に頼らざるべからず。而して汝らもし誠心よりわが言に頼らば、彼の金版と、胸当、レーバンの剣、「ウリムとトミム」、すなわちジェレドの兄弟が山の上にて神と向き会いて語りしとき与えられたるものと、また紅海のほとりなる荒野に於てリーハイが与えられたる不思議なる指示器とを汝らに一目見すべし」。

「汝らこれらのものを見ることを得るは信仰によるなり。すなわち、古えの予言者の持ちたる信仰によるなり」。

「汝ら信仰を得てこれらのものを両の眼をもて見たる上は神の力によりこれらのものの証をなすべし」。

「而して、わが僕ジョセフ・スミス（二代目）の亡ぼされざらんために、而もわれこの業を為して人の子らにわが義しき志を果さんがために汝らこの事を為せ」。

「また汝らかく証をなすべし。すなわち汝らは、わが僕ジョセフ・スミス（二代目）が正にこれらを見たる如く汝らも見たり。彼のこれを見たるはわが能力により、また彼の信仰を有ちしによる、と」。

「また彼はその書を、正にわが命じたる部分を飜訳したり。而してこの事は汝の主、汝の神生きたもうが如く真実なりと」。

「それがために、汝らは彼と同じ能力と同じ信仰と彼に賜わりたると同じ賜とを得たり」。

「而して汝らわが与えたるこの最後の誡命を守らば、地獄の門も汝らに打ち勝つ能わず。そはわが恩恵は汝らに充ち満ちて、汝らは終りの日に高く挙げらるればなり」。

「而し汝らの主、汝らの神なるイエス・キリストこの事を汝らに語るは、人の汝らにわが義しき志を果さんがためなり。アーメン」。

三、見証者たち原版を見る。　この啓示が下ってから間もなく以下の四人、すなわちジョセフ・スミス、オリヴァ・カウドリ、デビッド・ホイットマーおよびマーテン・ハリスは森の中へ退いてへり下った祈りを捧げた。これらの四人はかねて御約束の祝福を賜わるよう主におねがいをした。一人一人は前に打ち合せておいた通りかわるがわる祈った。ジョセフが最初に祈りを捧げ、それから他の三人が祈ったが何ら神のお恵みのしるしである御答えがなかったから、再び前と同じ順で各自が祈った。しかし、今度も何らしるしがなかった。マーテン・ハリスは自分が神の誡命に背いたから御答えが得られないのだと思って、その場から引き退ると申し出た。依って相談の結果皆の意見が一致したのでマーテンは引き退った。そこで三人はひざまずいて祈りを捧げた。するとたちまち三人はその頭上に非常に輝やく光を見た。そして一人の天使が天降り彼らの前に立った。天使はその手に原版を携えて居られた。

発展のために

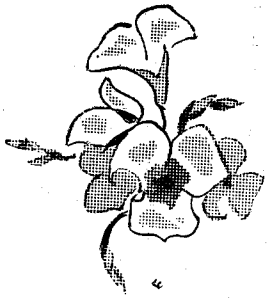
中野百合子（仙台支部）

聖さん会の席上で、私たちが耳を傾ける兄弟姉妹の話は、いつでも有益なものとして、きけるものであるが、私がもっとも心をおどらせ、期待をもってききいるのは、バプテスマをまさに受けようとしている、あるいはたったいま、受けたばかりの新しい信者の人々の話である。私はこのような話を、心ひそかに「魂の記録」とよんでいる。

ほこりを舞いあげて疾走する車の間をぬうように、人の群れがゆききする。それぞれの生活と目的をもち、さらに人間のすべての条件をそなえて——。そしてその間を、これはまさしく神の僕（しもべ）としかいいようのない、異色のふんい気を漂わせながら、宣教師が白い紙片を、人々の手に渡してゆく。うず高く印刷されたチラシの山が、しだいにくずされて、何百枚、何千枚という紙片が人々の間にまかれてゆく。それらの紙片のゆくえがことごとくムダであっただろうか。もちろん否である。

合図のベルとともに学校から、官庁から、どっとはき出される人の流れ。一日の解放感を、あらわに身体全体からふりまきながら、彼らは次々と押し寄せてくる。道端にたたずむふたりづれの宣教師には目もくれない。やがて、ひとりの人をつかまえて、宣教師はていねいに帽子をとる。短い会話。そして人はまたあわただしく歩み去ってゆく。「私はモルモンの宣教師ですが……」なんど同じことばをくり返すことか。その何百回かのくり返しの中で「モルモン」ということばが、ひとりの人間の耳を、否、魂を積極的にとらえないと、だれが推論できようか。神のみわざは私たちの気づかない、思いもよらない時と場所で忠実な僕たちによって、たゆみなく成就されてゆく。実際、一枚の紙片の上に印刷された「モルモン」ということば、異国の宣教師の独特のアクセントとともに耳にはいった「モルモン」という呼び名。なにかを求める少くとも人生について、人間の救いについてなんらかのまじめな考察を重ねつつある人々にとって、そのことばが特別のひびきをもって、彼らの心をとらえる場合がたびたびあったのである。

相半ばする疑いと期待に心をおどらせて、彼らははじめて教会の門をくぐる。家庭集会やがて定例集会への出席、兄弟姉妹とのまじわり、バプテスマ……。私は正確な数字を知らないが、ここまで順調（?）にたどれる人は、教会を訪れたことのあるすべての人々に



若き世代の

比べて、何パーセントくらいだろううか。

だれもが経験ずみのことであるが、はじめて壇上に立って話をするとき、たいていの人は夢中で、なにをしゃべったか自分でも気がつかないくらい、気おくれがしたり、緊張したりするものである。それでもなお神を求め神を見出し、神のみおしえに合致した生活を営もうと決意するまでの心の記録や、さらに新しく兄弟姉妹とお互いに呼びかわせるよろこびなどを述べられるとき、たとえその表現が不十分で稚拙であっても、語り手の感激と決意は、十分にきく者の胸にひびいてくるのである。

このような話もひとつの体験談として取り扱われるのだろうが、私には、それが神にかんするゆえ、信仰との関連性のゆえに、単なる告白を越えたひとつのあかしとして、ききとれるのである。あかしはすべて「魂の記録」と呼ばれるべきものであろう。しかし、とくに私がかく名づけて区別するのは、それがなにごとにおいても、もっとも大切な「第一歩」「初心」のひれきであり、そのゆえにより真しなういういしい、素朴な願望を伝え未来の可能性をきく者の心に夢みさせる、それらの理由にほかならないのである。さらに心をこめてこのような話にききいること自体が、私の魂に眠っていた適去の記録をよび起こし確認し、それが、自分以外のものの体験へのひとつの参加となって、新しい経験として自分のものとなってつけ加えられる。その事実を私はとうといと思うのである。

昨日バプテスマを受けたばかりの人と、比較的長い間信者である人との間には、たしかに、ひとつの簡単なことば、信仰、悔い改め、祈りなどを取りあげても、そのことばの意味するもの、すなわち、ことばによって私たちの心の中に、展開される世界のひろがり、厚み、深さなどに大きな隔たりがあることは否めない。お互いの思いやりの不足とばかりいえない。新しい信者と古い信者の間の確執の原因も、このようなことばの概念の相違に気づかず、無関心であることの結果とも考えられる場合がある。しかし、私はこのような相違は、なくてはならぬものであり、もしなければ、なんのための長い信仰生活であったかと、自分自身をきびしくいましめなくてはならないものと考えいる。なぜなら、真理のもつ奥行きははかりしれず、人間の進歩にも限りがないからである。

しかし、同時に、次のようなこともいえる

と思う、（二月号七十二頁）「が、信仰そのものは、むずかしいものでなく、単純なものだ。教義をくわしく知らねば得ることができぬというものではない」このことばの意味するところもまた、たての一面の如く、真理である。わかりきったことを改めて説明するようだが、このことばにいくらかでも不審をもつ人たちへ、私なりの見解を述べてみたいと思う。

ゲリット・ディヨング・ジュニア（福音の実践の著者）は「信仰は本質的にいって、それ自体の力に依存しつつ、希望と確信との間に横たわるところの感情である。信仰はみることができず、完全に知ることができないものが真実であり、また真実になるであろう確信、および確証の感情である」といっているが、たしかに信仰が単純とされるのは、みぬものをまことする、理性だけではとうてい越えがたい深い断層を、それ自体の、力によって、あっという間に越えてゆく、その見事な超絶の中に存するのではないかと思う。信仰をもつことによって自分自身、および周囲におよぼす影響や、信仰をささえる人間の内的生活は各人各様で、あるいは複雑な様相を示すかもしれないが、それも理性しか信じない人々にとって、永遠のなぞでしかないあの超絶の、いちようさに比べれば、たしかに信じるものにとっては、信仰はむずかしいものでなく、単純なものとはっきりいえるような気がする。

では、すべての兄弟姉妹にとって、なににもまして大切なことはなんであるか。それはいうまでもなく「その時を出発点として、自分の信仰をできるだけ立派に育てるようにすべきだ」（二月号七十二頁）ということであると思う。

米国大統領のことばをかりるまでもなく、たいまつはいつの時代にあっても若い世代に引きつがれるのであり、私たちの教会でもこのことは真実である。この地上にうちたてられる神の王国の壮大にして高貴なる未来図を心に描くとき、その建設のために惜しげもなくさしのべられた若い手の栄光を思って、期待に胸がはずむ思いがする。そして私たちは少しでも彼らの人間性の発展のために私たちの積み重ねた経験と知恵が、役立てばと心から願わずにはいられない。

毎週、どこかの支部で、いつでもだれかが新しく神の僕として門出するよろこびのあかしを述べていることであろう。

私たちは老いも若きも、ひとしく、次のようなことを心がけていきたいと思う。人間の弱点によってもたらされる精神の曇りやゆがみを、できるだけ取り除き、物事をみつめるつねに新鮮な眼と、けっして外面的なもののみによって、まどわどわされない透徹した英知と、年月とともに、たやすくは老いぬ柔軟な心をもち、他人の話に耳を傾け、新しい発見に伴うおどろきとよろこびを自身の成長に役立たせてゆく。そしてしだいに繁雑さとけんそうの度を加えてゆくかにみえる近代生活の中にあって、私たちの健康でたくましい生きることへのエネルギーを、いつもその根源において、植物の根と大地との関係の如く、つまり母なるもの、私たちを生み、育ててくれたオリジナルなものとの関連において、発展させることができるよう。わかりやすくいえば、いつも第一歩と初心に立ちもどれる謙虚さを忘れないように。

最後に欲ばりのようだが、自他ともの発展のために、瞬時の努力を惜しまない、真しで誠実な精神の持ち主でありたいと、心から願うものである。（日曜学校Bコース教師）＝この原稿は二月号「よきハイティーン群と私」と関連して読んでほしい＝

モルモン家庭訪問

第１回

上野山家を訪ねて

この頁では改宗されてモルモンとなった家族を紹介します。

『父たる者よ、子供をおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい。

夫たる者よ、キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。

子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。

監督は、非難のない人で、ひとりの妻の夫であり、自らを制し、慎み深く、礼儀正しく旅人をもてなし、よく教えることができ、酒を好まず、乱暴でなく、寛容であって、人と争わず、金に淡泊で、自分の家をよく治め謹厳であって、子供たちを従順な者に育てている人でなければならない』

ひな祭の夜、快い春雨を頬に感じながら上野山研次郎兄弟（三月十九日に岡町支部長に任命された）の御家族を訪問し、福音の力、神の恵みの実例を見てこれを皆様に紹介できますことを心から感謝しております。

苦難の年月

上野山兄弟は和歌山で製氷工場を営んでいましたが、第二次大戦の頃戦死又病死と相次いで肉親の兄弟を失い、その残された家族のために工場を売却し、全くの裸一貫で再出発しなければなりませんでした。

そして奥様の恵美子姉妹と当時六才、五才、一才の真杉（マスキ）、建弥（タツヤ）、寿樹（トシキ）三人の御子息を連れて故郷を去り大阪に移りました。其の後も馴れぬ仕事や其の他の事情で転居を重ね、数年前、岡町支部教会堂東北、徒歩で約十五分の所に住まれたのが現住所だそうです。

愛情と感謝、信頼と尊敬

本当に大変でしたね、私は思わずこう言いました。

上野山兄弟は一寸、奥様と御子息の顔を眺めて、

「全く苦労をかけました。勿論私の工場があると思って妻も嫁いで来たでしょうに。それを売って兄弟達の妻子に全部わけてしまって

も黙っていてくれました。私の腕で幸福にしてみせると決意しましたが、反対に妻に養ってもらう結果になったりしましてね。」

上野山兄弟が馴れぬサラリーマン等をした不遇の時、奥様は教師をして家計を助けられたのです。

終戦後のあの混乱した社会―配給、買出し遅配―で三児を抱えて奮斗する主婦の姿!!

恵美子姉妹は静かに

「本当に主人は良い人でした……」と、当時の苦労を説明されませんでした。

一体、こうした御両親の生活が御子息達にどう映っているだろうかと質問しましたところ、

真杉兄弟（大学二年）「僕の家の経済状態で大学教育まで受けさせてくれることを心から感謝しています。また僕たちが自由に振舞うことを許してくれて嬉しいです。」

建弥兄弥（大学一年）「少し無理な願いでも大体聞入れてくれますので感謝していますが父の年令を考えると早くしっかりしなければと思います。」

寿樹兄弟（本日高校入試日）は兄さんたちに自分の感想を言い尽されたとの表情をされました。

私は更に尋ねました。皆様は将来家庭を持たれる時、御両親のようになりたいと望まれますかと、すると異口同音に、

「ハイ、本当に私たちの両親のようになりたいです。しかしなれるかどうか心配です」との返答でした。

また御両親は、

「私たちはこの子たちを信頼しています。もう私たちの心配するようなことはないと思いますので自由にさせます。ただ自分のしたいこと、行った事を知らせて欲しいだけです。

私はこれらの言葉を聞いて非常な感動を覚えました。

この家族には宝がある!!

信頼と尊敬、愛情と感謝によって結ばれた一致感を深く印象づけられました。

上野山兄弘が語られた通り、この家族は大きな邸宅を持っていないし、あり余る程の金銭を持っておられないだろう。然し一人一人が十分に幸福感を味っているのがこの家族ではないだろうか。

神の恵みし生活の力

上野山兄弟は一語、一語かみしめるように話された。

「実に不思議でなりません。どんなにして今日まで家族を養って来たのか、二人の大学生と更に一人を高校に入れる経済力がどこにあるのか。福音を知った事は、大きな恵みでした。また野田よしえ姉妹―元金沢支部出身宣教師現在ハワイ在住―の熱意によって、子供達が改宗し、家族全員が教会員になれた事は全く神様の恵です。

家族が交替で祈りを捧げることは一人一人の力を増し、更に家族全体の一致和合の気持を強くして頂けますね。」

そして最後に今後の抱負を伺いましたところ

「改宗した新しい会員たちが教会の良さを理解する前に誠を重荷に感じて去って行くのかとても残念です。新に発足した親睦委員会を有効に活用するよう働きたい。そしてもう一つは支部会員の結婚の問題です何か適齢期の方々のための紹介の機会を考えてあげたいものです。」と結び、

短い対談でしたが、美しいモルモンの家庭の一端を記録的に報告して、読者それぞれの立場で価値あるものにして頂きたいと存じます。

上野山兄弟　岡町支部長、親睦委員会々長
恵美子姉妹　子供日曜学校責任者、親睦委員会々員　扶助南会文学教師

（安芸宏記）

YOUNGER GENERATION

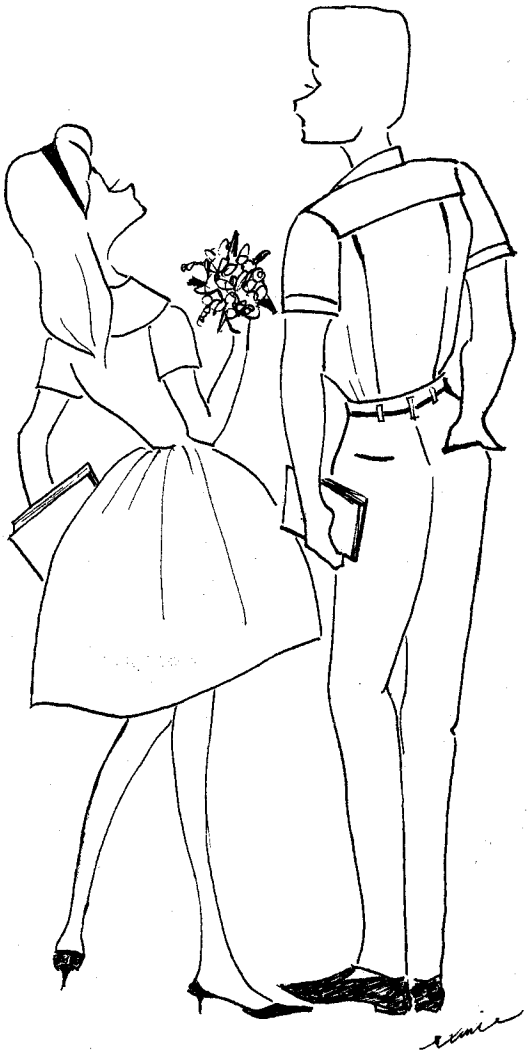
友への手紙

東海林絹江
（仙台支部）

×月×日
自分のバプテスマが五日後に迫っているいまになって、初めてあなたへお知らせすることを私は苦しく思います。

神を信じる心のやすらぎを、信ずる故に授けられる限りない愛を、東京でひとり苦しんでいるあなたにもどうかして分け与えてやりたい、そう心から思います。あなたが祈り聖書を読み、讃美歌をお歌いになる場所が、いつかその門をくぐったことのあるモルモン教会なら、どんなにすばらしいのに、と私は思います。

×月×日
「教会のバプテスマを受けられることを深く喜びたいと思



います。あなたもぼくのせん望している明るい健康的な世界に住んでいたのだと、あなたのバプテスマを前にして思っています。あなたのようにすなおに信じうる人は、もともと神から祝福されている人々なのです。疑り深い人間は神からも人間からもきらわれます。そして神の救いからも人間社会からも脱落してしまのです」—あなたのいわれていることはまちがっていると私はすぐ感じました。神様はなぜ疑り深い自分をきらっているか、どうしておわかりになりますか。神様のみこころをどうしてあなたははかり知ることができるでしょう。私はこれらの非を筋道たてて反ばくすることばを持っていません。私は心から信じていることをあなたに話したのです。

×月×日

あなたは前の手紙で「とくにモルモンのような神秘主義的な考え方にはとてもついていけません」といわれました神秘主義を辞書で調べてみたら「神または絶対者の認識の方法にかんする特殊の見解。理性主義を排して内的直観を重んじ、宗教的信仰の内面的および自律を強調する」とあり、理性は「実践的原理に従って意思と行為とを規定する能力」とありましたから、ことばの意味はほぼわかりました。けれどもなぜあなたはモルモン教会の教えを神秘主義的だといわれたか、少しもわからないのです。ある兄弟はあなたのそのことばを善意に解釈したらといいました。別の兄弟はそういうことばに迷わされ神経質になりすぎて、自分自身を見失うようなことがないようにといいました。しかし私はあなたに知ってほしかったのです。教会に行き祈り、そして、信ずることによってうる限りないしあわせを。

×月×日

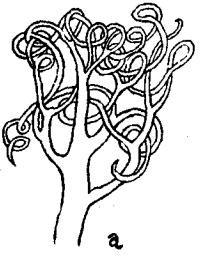
いま少しも自分自身をたよりなく、ちょっと目をはなすとバラバラにこわれきってしまいそうな、恐ろしい錯覚に陥っています。教会内の対人関係は、あるワクのうちにあるだけに、いやなところも目立ちます。みずから求めた世界の中に、愛とか尊敬とかがなおざりにされているのをみたとき、どんなに悲しかったか、どんなに、くやしかったか。讃美歌の練習をしながらだれかの胸に顔をうずめて大声で泣き出したい衝動をこらえるのがやっとでした。他人のあやまちを寛容な態度で見守りえない自分がまちがっていることを知っています。けれどもどうしようもありません。

×月×日

「信じていないのに信じているように装い、それによって起こる宗教的なものにあなたは酔っているのです」そう考えられても少しも悲しく思いません。自分でそうではないことを知っているからです。「虚無にたえられない人間の弱さが神という絶対者の幻想を生み出したのではないか。

人間の弱さについて

佐伯忠晴
編集部員



X刑務所の管理部長さんが或るとき、こんな話をしました。

「最近、私の刑務所で敬老会を催しまして、七十才以上の服役中の老人に集ってもらいました。ほんの形ばかりの敬老会だったのですがこの刑務所には七十才以上の老人が三十余名もいるのです。中には、前科十八犯、刑務所生活三十八年という人もおります。まあ、人生の半分を刑務所で過ごしていたようなものでしょう。」私はこの敬老会に出席された一人の尊敬する先生に彼らと直接お話しされたことを興味深く聞かせてもらいました。

先生は彼らの希望を尋ねますと、彼らは、「あと十年、生きたい。」ただそう答えたそうです。先生はさらにその理由を聞きますと我々は来年ここを出られるのですが、あと十年たてば前科が消えます。せめて死ぬ時は身心共にきれいな状態で死にたい」このように云ったそうです。

私はこの服役中の老人たちの話を先生から聞きながら人間の本性はやっぱり〝善〟なのだ。いかなる人でも信じよう！愛そう！ということをつくづく感じました。

……だが、この老人達も若い頃はこの刑務所に入ることを自慢していたときもあったんだよ。先生はそうつけ加えていうのです。私は彼の話を聞きながら今度は人間の弱さについて考えていました。

「我々はあと十年たてば前科が消える、せめて死ぬ時はきれいな身体になって死にたい。」この老人たちは死を前にして、真の自分をみつめ始めたのでしょう。これはきっと、実存主義のいうように死と直面するとき、人間の生は一切の「つぐない」や「ごまかし」を抜ぎ捨てて真剣に生きるようになることを意味しているのかもしれません。でも、私はここで実存主義云々について述べようとしているのではありません。私の心を強く打った、この老人たちの自己反省に耳を傾けたかったのです。と同時に私達自身のことを考えてみたかったのです。人間はとかく若い時は、自分自身にいろいろなつぐないをかぶせて無理しがちです。特くに私達青年期はこの傾向が目立って強く現れる時期であると思います。

この刑務所にに入っている大部分の人達はこの青年期の過ち、若き日の誤まちが刑務所生活の初めになっています。では何故、青年期にこのような失敗が多いのでしょうか、皆さんは、モルモンの青年はこのようなことは絶対ないと思うにちがいありません。私もそう信じます、でも、モルモンとて弱い人間です。共に私はこの問題を考えたいと思います。

皆さんはイソップ物語の中にでてくる「獅子と毛皮を着たろば」の話をお聞きのことと思います。〝獅子〟が森にくると人々や獣た

ちが逃げだすのですが、〝ろば〟がいくらいばって森を歩いてみても誰も逃げようとしません。ますます〝ろば〟は〝獅子〟がうらやましくなり、そこで〝獅子〟の毛皮を着て森を歩いてみることにしました。すると人々も逃げるし獣たちも逃げだします。それで〝ろば〟は得意になっていました。しかしその時です！　風が吹いてきて毛皮がはぎ取られ、〝ろば〟は裸にされてしまいました。すると今まで逃げていた獣たちがやってきて、〝ろば〟は木切や棒ではたかれてしまったのです。

この話は私達にいろいろなことを暗示してくれます。それは青年期というのがまさにこの〝ろば〟のような心境に私には思えます。実際は自分は強くないのだが、強いふりをしてみたい。又そういう気持の上で強くなりたい、でも実力が伴なわない。青年期はそういう時期のように思はれます。それに妙に気持ばかりが先走りしてしまうのです。このことは一つの社会的な現象だと思います。それを知って自分の実力養成に力を注げば文句はないのですが、自分の無力観を強く感じれば、意識すればする程、どうも間に会はせの満足の方へ走ってしまいがちです。きっと、このろばのように外見だけの強がりで満足しようとするのでしょう。たぶんこのイソップ物語の〝ろば〟の話もうわべだけの真似の危険性を教えているのではないでしょうか。この刑務所に服役している老人たちも死を前にして自分の人生を振り返ってみたとき、勿論、犯罪への動機には経済的な、家庭的な、社会的な面など、外部よりの働きかけもあったでしょうがそれと同時に自分の方から背伸びという内面的なものもあったことも背定せざるを得なかったことでしょう。

人間というものは非常に弱い者です。ちょっとしたことがきっかけで心にもないようなことを仕出がしてしまうものです。私達は強ならなければなりません。人間の心の奥深くから自発的な要求となって湧いてくるのが信仰だと思います。

私達はこの弱き人間の実体をよく知り、自己の内部に現われてくる現象をうわべだけの満足感に終らせず、一歩一歩誠実に進んで行きたいものです。年老い、死を前にして自分の生き方を悔いているこの不幸な老人たちの言葉に私達はもっと耳を傾けてよいものがあるのではないでしょうか！　人間皆兄弟である。

神は、個性と体とを持っておいでになる神である、またそれはまことの神であると信ずる人はみなその生活が楽しく美しい。実際、生きていることがすばらしいのである。こ世に生きていると言う意識の中にも喜び、それも我を忘れるほどの喜びさえも経験することができる。人が自分は独立した一個の実在であると感ずるとき、またこの実在は神の大きな創造の計画の中にある一部分であると悟るときに、何にもまさる満足がある。この関係を知らないほど貧しく、またこの関係を知らないほど金があり、またこの関係を知らないほど不具である人は一人もない。

この信仰が根を下ろしたら、若い人々は宗教心の基礎がしっかりして、どのような物質観的哲学によっても動かされない。

（デビット・O・マッケイ）

Genaology

——大会説教——

家族の永遠の交わり

エルレイ・L・クリスチヤンセン
（十二使徒会補助）

私は話そうと思ったことを冷蔵庫にしまって置きますがそれを取出す頃には役に立たない程冷たくなってしまっていますので只私はあることがらについて感謝の意を述べて見たいと思います。

私は〝いざ救の日を楽まむ〟の歌が好きですが私の考えではこの教会の内で私たちは充分に楽しんでいないように思います。私たちは夜に昼に楽しめることに、もっと感謝すべきだと思われますがまだ充分にそれが表現されておりません。私は今日、昨日および一昨日この大会で教えられたことに感謝します。私は私がここに座っている同様に私たちが神および私たちの神に対する関係について無知であっては救われないと言うことがいかに事実であるかを感じます。そして私たちはこの教会の会員として確かによく教えられて来たのでこの事に関して無知であるべきでないと思います。

真理ほど偉大にして価値ある報賞はありません。教会で私たちは真理を教えられております。私たちは正しい幸福な生きかたを教えられております。私たちは世の中で正しい道よりもよい生きる道を知らず、この正しい道はもちろん主の道であります。

私たちはすべてのことにおいて正を知るように教えられております。すなわちいかに悔改めいかに私たちの道を変更するか、私たちは誰にいかに奉仕するかを教えられております。私たちは結婚の誓約に入る適当な道を教えられております。実際にイエス・キリストの福音は私たちが愛する者たちと一諸にとこしえに幸福なありさまで神と共に住めるように（モーサヤ二・四一）この準備期間を安全に過すように指示しているのであります。

私はモルモン経のこの言葉が好きです。私たちは真実に、神は私たちの父であり、私たちはその息子、娘たちであり、神は私たちを愛し、私たちの福祉と幸不幸に関心を持っておられると教えられております。神は私たちがこの世における務めを終えたら誉れある解任をもって帰郷し、幸福と有用な状態をもって神と共に住まうように望んでおられるのであります。

私は愛する者すなわち兄弟姉妹であるあなたたち皆と、その内でも特に私の同伴者、子供たち孫たちおよび先祖たちと共に交わりを続けれると言うことを除いてあまり天国に関心を持っておりません。私は夫と妻、父と母親と子の関係が私たちが正しく備えるならその本質において永続すると教える教会に属し

ていることを感謝しております。家族の永続と言う原則、教義、実施ほど人間の理性に訴えるものはない。私は福音を考えれば考えるほどそれが家族とその永遠の交わりをめぐっていることを見出すのであります。

私は昼休みに家に帰った時十一才の少年の自筆の手紙を受取りました。

（こぞんじのように神殿では私たちが祈りの時に思い出せるように病気や悩める人たちの名を記入出来る名簿があります）手紙には次のように書かれてありました。

〝親愛なる神殿の務め人さん〟どうぞ私のお父さんの名を祈りの名簿に載せて下さい、私たちはお父さんが教会の会員になってお母さんや私たちを神殿につれて行ってくれるように願っているのです、私たちは心からお父さんが知恵の言葉を守れるように天のお父さんが援けて下さるように祈っております。お父さんの名前は……です。

あなたの心からの兄弟……十一才

この手紙は心からその両親を愛し、その交わりのこの世を越えて永えなるように願っている少年を告げております。

私は天の御父が寛容の父であられることを感謝します。そして御父が私と共にましますなら私は私の生涯に真実である者と共に御父の御前に共に留るよう決心致します。

神が私たち兄弟姉妹が楽しむように祝福して下さいますように　また私たちが感謝し、神の豊かな祝福に価値ある者となるように、また非会員である私たちの友人たちと福音を分ち合えるようにまた私たちが単に言葉の上だけでなく行為をもって他人への奉仕をもって証を身につけることが、出来るように祝福して下さいますように、主イエス・キリストの御名を通してお祈り致します。アーメン

MELCHIZEDEK
PRIESTHOOD

メルケゼデク神権

先月は神権管理図の説明と定員会の目的について少し述べましたが、今月は定員会の委員会の仕事について、述べてみたいと思います。

定員会々長会が定員会の管理経営を行う。

定員会の委員会

定員会々長会が定員会の管理経営を行うのを助けるために、次のような一般分野で働きをするため委員を任命することができる。

一、個人的幸福
二、教会への奉仕
三、事実調査と報告

個人的幸福

この委員会は定員会は、定員会の会員の物質的経済的必要について世話をする。とりわけ彼らは次のような領域で奉仕をするようにたのまれることがある。

一、定員会の基金を募るために立てた計画を監督すること。
二、伝道部にある定員会の会員もしくは、その他の人々を、必要な程度に援助する
三、宣教師の家族の経済上の福利を世話する助けをする。
四、経済状態を良くする必要のある定員会の会員に対して復職をさせたりもっと良い勤め先を探したりする。
五、教会の活動に参加できるために運輸機関を必要とする会員に便宜を与えること

教会への奉仕

この委員会は定員会々員の霊に関する必要の世話をする。とりわけ、彼らは次の領域において奉仕をするようにたのまれることがある。

一、不活潑な定員会の会員およびその家族が、活潑になるように努力する。
二、非専任宣教師および専任宣教師の働きを助成し奨励する。
三、定員会の会員およびその家族が神殿へ行く資格をつけるようにはげます。
四、系図の探求も含めて、死者のために神殿の儀式が早く行われるようにする。
五、神権の諸儀式を執行する方法を、定員会の会員すべてに教える。
六、定員会の会員が一人のこらず教会の任務を必ず持つようにする。
七、定員会の会員とその家族が次にあげる悪徳に染まらぬようにする計画を助成する。
　イ、茶、コーヒー、タバコ、アルコール性飲料および麻すい性の薬を用いること
　ロ、わいせつな文学を読むこと。
　ハ、何にてもあれ不道徳もしくは、不品行なことを行って自分の品性を落すこと。
　ニ、安息日を破ること。
　ホ、正直に「十分の一」を納めないこと
八、社交的の催しおよび体育的の催しを監督する。

事実調査と報告

この委員会は必要な教会の記録をつけ、定員会の役員とほかの役員たちに報告をしなければならない。彼らは次にあげるようなことをたのまれることがある。

一、定員会の出席簿と議事録とをつける。
二、伝道部へ提出するために定期の定員会報告をつくる。
三、定員会の役員その他の人々が現在進歩している状態および特に注意を要することに気づくように、歴史的出来事、経営の概観統計の編集グラフや図表の作製記録などを行う。
四、自衛隊員を含めて、家庭を離れている定員会の会員すべてと、少なくとも毎月一回文通を行う。
五、自衛隊に入っているすすべての定員会々員に対して定員会の費用をもって「聖徒の道」の予約購読誌を送附するように取りきめること。
六、定員会々報を発行したり、チャーチ・ニュース、インプルーブメント・エラその他の出版物に適当な記事や宣伝になる発表をするようなことを含む、定員会の宣伝プログラムを行う。

アロン神権

ブランチ・ティーチングレッスン

四月用「モルモン経」

モルモン経はこれまでに書かれた本の中で最もすぐれたものの一つであります。モルモン経の起原はほかに類のないものであって、復活した天の使者モロナイがジョセフ・スミスに授けた金版から英語に飜訳されました。三人の見証者たちは、天使が金版の頁を一枚一枚めくって見せるのを眼のあたり見、またそれが神の賜と能力によって飜訳されたとお言いになる神の声を聞き、その上金版に刻まれた記録は真実であると証しをせよと命ぜられました。このほかに八人の見証者たちがこの原版を実際に見て手で触りました。予言者ジョセフ・スミスは神のお召しを受けてこの本を書くように選ばれた人であります（「教義と聖約」二十四〇一参照）。主はそれが本当であるとはっきりお言いになりました（「教義と聖約」十六〇六参照）。多くの人々はジョセフ・スミスが最初に示現を受けた時、一人の証人もその場に居合わせなかったからと言って、その示現を否定しようとしますが、単に否定するだけではモルモン経が聖典であるという事実を言い破ることできないにちがいありません。モルモン経は過去百三十年にわたって人々から攻撃を受けましたが、モルモン経が真実の聖典であるということに味方をする証拠はこれまでよりもますます強くなっています。モルモン経がきわめて大きな意義をもっている本であるということを理解するように努めて下さい。

もしもモルモン経が真実であるなら、神は生きたもうて現代に実際その姿をお現わしになりました。もしモルモン経が真実であるなら、イエスは神の御子であり、天地の創り主全人類の救い主であり贖い主である御方であります。もしもモルモン経が真実であるなら父なる神と御子イエス・キリストとはジョセフ・スミスにお現われになり、このようにしてジョセフ・スミスは予言者になりました。もしもモルモン経が真実であるなら、末日聖徒イエス・キリスト教会は神の承認を受けた地球上唯一つの教会であります。もしもモルモン経が真実であるなら、復活した天の使者がジョセフ・スミスに現われて教えを授けたので、人類の不死不滅であることは真実であります。

モルモン経は神の新しい証人であります。モルモン経はまた旧新約聖書の証人であり、一方旧新約聖書はモルモン経の証人であります。聖書にのっている多くの予言は、モルモン経の出現によって成就いたしました（エゼキエル書三十七〇十六—二十、イザヤ書二十九〇四、ヨハネ伝十〇十六、黙示録十四〇六—七参照）。モルモン経の中には福音が余すところなく全部のっております（「教義と聖約」二十〇九）。世の人々は聖書とモルモン経とによって審かれるにちがいありません（「教義と聖約」二十〇十三参照）。モルモン経は、もしも人がモルモン経を祈りの心で読むならばモルモン経の真実であることを知るであろうという約束をのせている唯一の本であります（モロナイ書十〇三—参照）。

モルモン経の初版は五千部出ましたが、今やその二倍である一万部が毎週全世界に配布されています。モルモン経はわが教会最大の宣教師であります。無数の人々がモルモン経を読んで改宗したと証詞をしています。モルモン経は神を信ずる人々の心に強い信仰を生じさせます（ニーファイ第一書三〇七参照）。モルモン経は罪のない幼児でもバプテスマを受けないで死ぬと地獄へ落ちるという憎むべき考えを間違いであると言っています（モロナイ書第八章参照）。モルモン経はまた人間が死んで復活するまでの状態をはっきりと定めています（アルマ書第四十章参照）。モルモン経のもっている主な特色といえば、すべての人を説き伏せて善を行わせるということです（ニーファイ第三書三十三〇四）。モルモン経は、西半球（アメリカ大陸）の古代住民の子孫たちのために書かれたアメリカの聖典であると共に、「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させるため」に書かれたアメリカの聖典であります。

日曜学校ガイド　5月用

来たる五月十四日は「**母の日**」です。この日曜日も復活祭と同じように二分の話の代りに五分の話を二つ、用意したらよいと思います。讃美歌、話の内容などに各支部で「母の日」にふさわしいものを考えて、作って下さい。御参考までに二三次のようなものを提案致します。

大人の日曜学校

○「キリストの母について」（一九六〇年五月号の聖徒の道に大管長のお話など参考になる）

○「母になって知る喜び」—最近始めて子供をもった若き母

○「私の母」—中学高校生

子供の日曜学校

「あなたのおかあさんはどんなことをあなたにしてくれますか」—一人づつ聞いてみる

「おかあさんが喜ぶようなものにどんなものがあるでしょう」「あなたはそのうちどんなことをすることができるでしょう?」など話合ったら面白いと思います。

役員、教師の皆様へ

ある日私の話に興味をもち日曜学校に出席した一人の友達にその第一印象を尋ねたところ次のようなことを言いました。「初め握手を求められたときは一寸とまどったが皆親切で友好的でなごやかな雰囲気は外には見られないすばらしいものだった。しかし何か全能なる神を礼拝しているという厳粛な雰囲気が足りないのは残念な気がする」彼はかつてカトリックの教会に行ったことがあり型にはまった形式的なものが多々ありながらかなり敬けんな感じを受けたということであった。そしていろいろと話合った結果「キリストの教会には我々すべてが兄弟姉妹であるという和気あいあいたるものが必要であると同時に聖き安息日神聖なる会堂で我々の創り主なる天父を心から讃美し礼拝するという真剣なもの齟的なものも欠くべからざるものである」ということの結論を得ました。確かに我々モルモン教会はすべてについてかなりの自由をもっているために「敬虔」という大切なものを見失い勝ちです。しかし自由で伸び伸びしていること、なごやかであること、敬虔な雰囲気を一緒に教会内に保たせるという欲張り（?）は不可能なことでしょうか?勿論敬けんさというものは一人一人の神に対する謙遜でゆるぎない信仰感謝の気持などから自然に生れるものではありますが我々指導者はそのために考えるべきことして次の具体的な事柄について十分検討してこの難問題を解決しようではありませんか。

(1)始めて教会に来た人は、勝手が分りません。どうか親切なガイドを二人以上玄関に、夫婦、婚約者同志、親子、兄弟、友達など如何「今朝は誰々がガイドかな?」とすべての

人に期待させるようになればしめたもの。

(2)祈り会は十時十分に始まり全役員教師は出席しておりますか。祈り会に参加したすべての人々が神の御霊の導きを受ければもう日曜学校は半分成功したも同然です。そのためには責任ある人々のチェック、霊的な話あるいは聖句朗読、祈りだけで終始すべきで決して計画を作ったり、二分半の話手を決めたりしてはいけません。開会の歌は一曲だけでよくどんなことがあっても十分以内で終るようにして下さい。

(3)開会三分前、前奏が行われておりますか。オルガニストのいない支部はなるべく早く養成して開会するにふさわしい雰囲気を作って下さい。又この時までに責任のある人々は前の席におりますね。前奏が始まったら司会者席、会衆席には私語をする人がいないように管理者は気を配って下さい。雑談をしている人があったら柔かく協力をお願いするのは役員の責任であり又教会はあくまで各個人が天父なる神と交わるための場所であることの知識はレッスンによって会衆がすべて知ることは教師の責任である。

(4)十時三十分に必ず開会して下さい。時間のルーズさと敬虔なる雰囲気は水と油のようにあい入れないものです。いくら人数が少なくても、二分半の話手が来なくても時間通り始めて下さい。又よく遅れる会員には「来週は是非十時二十五分までいらっしして下さいませんか」というパンフレットを配るのもグッドアイディアと思いますが、結局遅れたらもうホールに入れないほど敬虔な雰囲気があるか（音楽会の如く）席がなくなってしまうかであればいいのですが……

(5)後方の人で讃美歌の本がなくて歌っていない人はありませんか。又求道者が一人ぽっちりにして置かれておりませんか。

(6)クラスの生徒はまばらに座っておりませんか。前の方からつめてもらって下さい。レッスンをし易くする先生のために又生徒同志が親しみを深めるために。隣りの人を紹介し合って皆が顔知りになればレッスンは半分成功したのも同然。

(7)生徒一人一人がレッスンに参加するようにレッスンを組立てて下さい。

(8)復級が全クラス同時の終了によって行われ敬虔なハーモニーで満されたホールに会衆が静かに入ってくるように計画して下さい。

(9)ホールの中でのお金の出し入れはできるだけ慎むように注意して下さい。又不活潑になった会員求道者のためにも気を配ってあげて下さい。特別な集会のときに招待状を出すとかグループを作って家庭訪問をするとか入院している人へのお見舞いを計画するとか。

(10)度々役員教師会を開いて日曜学校をもつと進歩させるための問題についてよく話合って下さい。少くとも一ケ月に二回　以上。

日曜学校五月練習の讃美歌百六番　降れる天使

この讃美歌は前に練習しましたが、まだ間違っていたり知らない方が多いようですからもう一度練習しましょう。この歌は全体を二つにわけられます。前半は・拍子ですがコーラスの所から・拍子になります。後半はつい急ぎがちになります。調子よく歌うのはよいのですが絶対にあわてずに指揮者は四拍子をはっきりと振って下さい。後半は下の段をソプラノ、アルト、テノールベースとうたって下さい。

六月の練習の讃美歌は一六五番「主よ我を聞きたまへ」です。

初等日曜学校五月練習の歌

子等は歌ふ　二六番　しあわせ

この歌がよくうたえる様になると子供達は毎週これを歌いたいと言い出します。それだけとてもきれいな歌です。ただ符点音符が多いので気をつけて下さい。調子よく歌え憶えて来ますと符点のついていない音符まで符点音符にうたってしまいますから気をつけて下さい伴奏者のいる支部は必ず伴奏をつて下さい六月の練習の讃美歌は八番「ラールゴ」です。

相　異　点

	イスラエル人	モルモン
(1)	BC，1400，約1300㎞の旅行	……AD，1846，約2100㎞の旅行
(2)	ゴーセンからエリコに至るまで延々40年間	……ノヴーからソートレークまで先発隊は17カ月
(3)	エジプトの奴れいから脱出する	……美しい町，神殿，家を後に追い払はれる
(4)	荒野にて「契約の箱」を運ぶ	……神殿を後に去らねばならなかつた

類　似　点

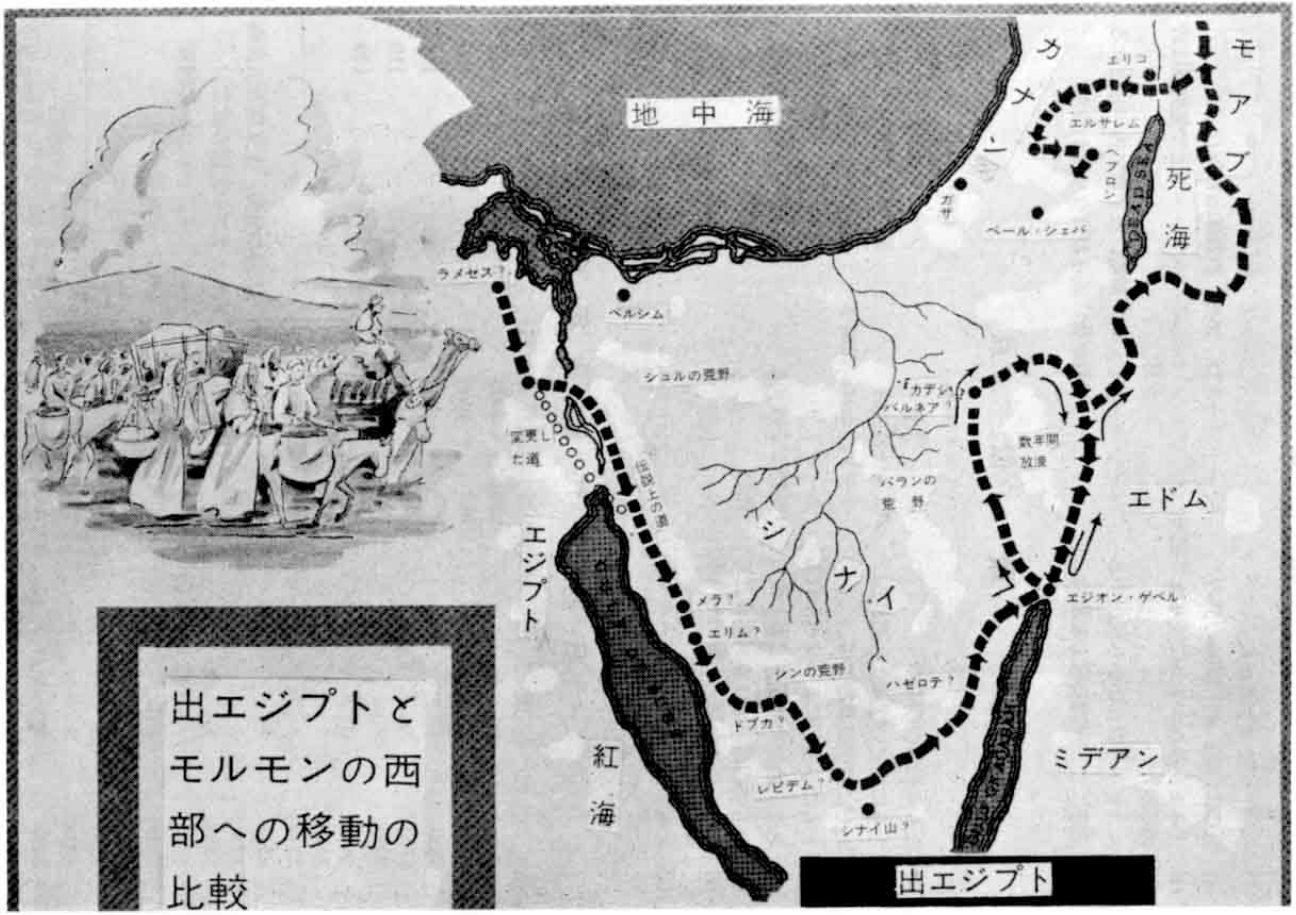
		イスエル人	モルモン
(1)	ともに約束の地に着く	カナンの地	ソートレークの谷
(2)	ともにひどい状態より逃れる	奴れいの境遇	暴徒による残酷な迫害
(3)	ともに運送は乗物にて	ラクダ，ロバ，四輪車	幕をつけた馬車
(4)	ともに予言者によつて導かれる	モーゼ	ブリガム，ヤング
(5)	ともに鍛錬の期間を必要とする	荒野にて40年間	無人地帯で～1～2年間
(6)	ともに約束の地は塩水湖の近く	死海	大塩湖
(7)	ともに家畜を飼い，食物を得るため土地を耕す	ロバ，小麦	牛，小麦，ともろこし
(8)	ともに熱心で信仰深い人々		

旧約時代重要年表

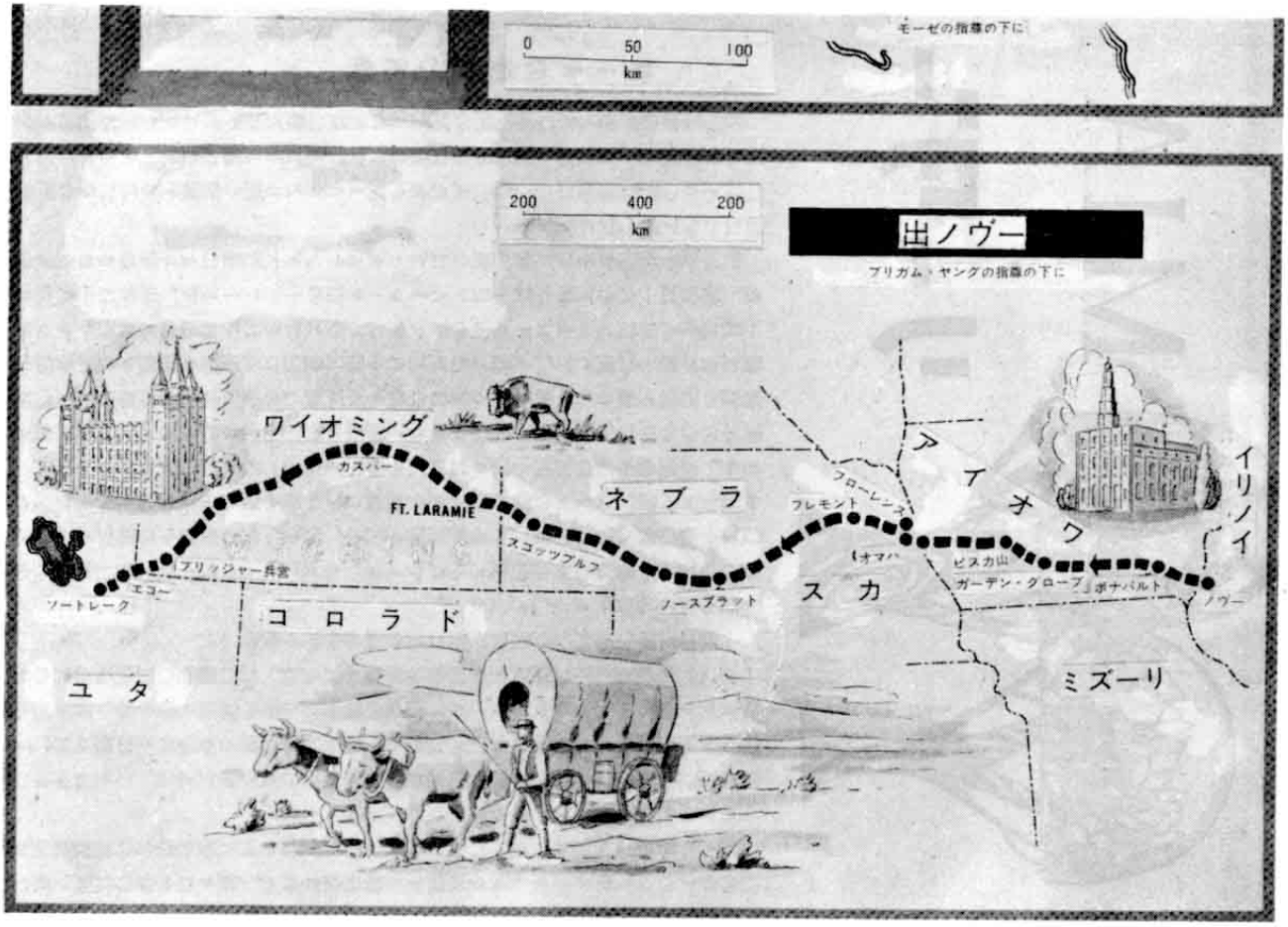
年代（B.C）	項目	全年令
4000	アダム	930
3900	セツ	912
3800	イノス	905
8700	カイナン	910
3600	マハラレル	895
3500	ジェレド	962
3400	エノク	430
3300	メトセラ	969
3200	ラメク	777
3000	ノア	950
2400	大洪水	
2400	アルパクサデ	438
2400	シラ	433
2300	エベル	464
2300	ペレグ	239
2200	リウ	239
2200	セレグ	230
2100	ナホル	148
2100	テラ	205

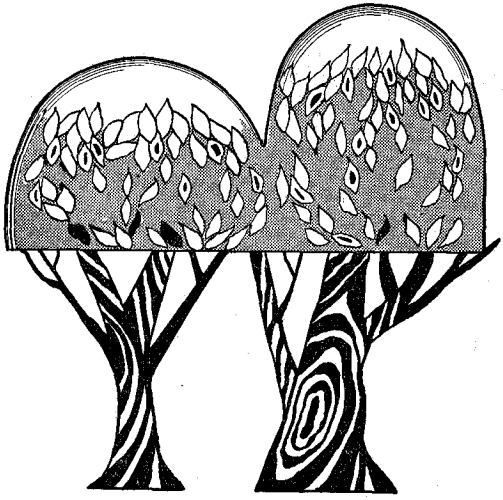
年代（B.C）	項目	全年令
2000	アアブラハム	175
1900	イサク	180
1900	ヤコブ	147
1800	ヨセフ	110
1400	モーゼ	120
1100	サムエル	
1000	ダビデ	
933	王国の分裂，十支族と二支族	
721	イスラエル王国の滅亡	
586	ユダヤ人、バビロンに捕虜	
520	神殿の再建	
400	マラキ	

A.D.71	ユダヤの滅亡
A.D.1948.5.15	イスラエル共和国誕生



出エジプトとモルモンの西部への移動の比較


0 50 100
km
モーゼの指導の下に
200 400 200
km
出ノヴー
ブリガム・ヤングの指導の下に
ワイオミング
カスパー
FT. LARAMIE
ネブラスカ
フローレンス
フレモント
オマハ
ビスカ山
ガーデン・グローブ
ボナパルト
ノヴー
イリノイ
アイオワ
ミズーリ
ブリッジャー兵営
エコー
ソートレーク
ユタ
コロラド
スコッツブルフ
ノースプラット



MIA リーダー

MIAの歴史と精神

当伝道部の発展と共に各支部のMIAの役員に最近バプテスマを受けられた会員の方々が選ばれ、日夜MIAの仕事に励まれていることと思います。そこで今日は新たにMIAの役員教師になられた人たちがMIAをより深く理解する為にその歴史と精神について書いてみます。

青年女子及び女子相互発達協会はブリガムヤング大管長により組織されたものである。前者は一八七五年六月十日ソルトレーク市の十三ワードで、後者は一八六九年十一月二十八日にソルトレーク市のライオンハウスでそれぞれ組織された。ヤング大管長は青年男子に向って、「我々は諸君らが相互発達の為協会を組織する様要請する。諸君の活動を通しこの偉大なる末日の働きの真理なる事、大いなる事の個人的証詞を青年の心の中に確立し彼等青年に神の下僕達の按手により与えられている賜物を発達させ、人生の永遠の原則を知り且つ之を応用させよ」と述べ、又青年女子に対して、「私は永い間、シオンの若い婦人達を組織して一つの協会を作る事を考えていた。そして今迄に教えられてきている諸原則を広め、教え、之を実践する事によって我が教会の年長の会員達を援助出来るからである。イスラエルの若い婦人達は真理の生きた証詞を得る必要がある。」と云った。

一九二二年に当教会の大管長会は次の様な声明を発表した。

「ヤング大管長の下に相互発達協会が組織された時、此の協会の目的が福音の諸教義が真理である事、ジョセフスミスの使命の神聖なる事の証詞を得る事、青年達の文学的趣味を発達させ、彼等の社交的活動が一層良好な管理と支配の下に置かれ、又効果的に福音の諸教義を教える事の出来る手段方法を与える事である、ことは明かに了解されていたのである。」

又その翌年に出された指示には、「若き青年男女の相互発達協会の総管理局は教会内の全てのレクリエーションを管理する様任命された。我々は余暇の計画、及び補助

組職のレクリエーション活動に対しより適切な計画を作る事、相互発達協会、プライマリーは組織内で友情を育成するのを目的として計画されるレクリエーション活動や社会的活動は勿論、他の全ての比類なき最高の活動を意味していると云う事を勧告したいと思う。」

ＭＩＡの誕生が以上述べた精神と目的を持っているので、当然今日あるＭＩＡも連綿と続くその伝統ある精神を背景として運営されぬばならない。具体的には次の点に留意し、実行して頂きたい。

一、支部ＭＩＡ役員の責任

(イ)支部ＭＩＡを管理し計画をよく理解してＭＩＡに出席する人達の希望に沿ったものであるかどうか常に確めること。その為には必らず祈禱会を開いてプログラムの細部に亘って打ち合わせをすべきである。

(ロ)全て任命された人の仕事を効果的に運営する為に支部長と常に連絡をとり支部長会に対する責任を遂行する事。ここで特に注意しなければならない事は、全て与えられた仕事は各々の職務に応じて公平に分担され特定の人だけに偏重しないようにする事で、沈滞気味の支部では少数の活潑会員に過重な責任が与えられる為に有能な会員をむしろ失う結果になってしまうから支部長会もこの点を留意して欲しい。

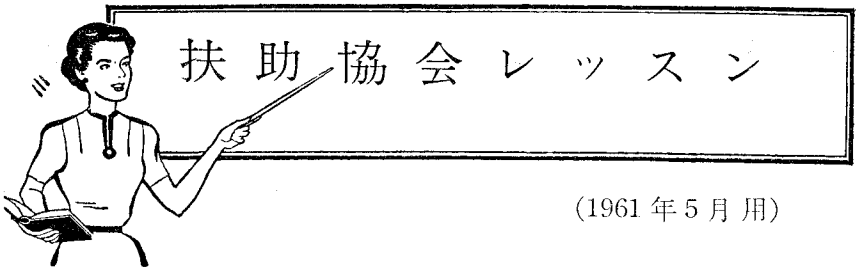
（来月号に続く）

五月二十五日「金と緑の舞踏会」（ゴールド・アンド・グリン・ボール）

五月の花の美しい宵の一刻、私達の足もいつしか円舞曲の誘いにのって軽るやかにリズムを踏んでゆく、こんな舞踏会に貴方は出席してみたいと思いませんか？　花の咲きにほう五月は真に私達の「金と緑の舞踏会」を開くに最適な季節です。先ずＭＩＡ手引付録三十六頁を読んで準備にとりかかりましょう。或る地方部は地方部単位でこれを開催したい旨を申し出ました。これは春の大会と同時に行われるものです。従って支部内でゴールド・アンド・グリン・ボールを開催し亦地方部大会でもこれを開く支部もあれば、支部でゴールド・アンド・グリーン・ボールを開催せずして、地方部のみの大会に参加する支部もあるわけです。（後者の場合は五月の一般活動に別のものを計画する必要がある。）

ゴールド・アンド・グリーン・ボールは一年中でも最も素晴しいダンスの夕べとなるはずです。此の会を成功に導くものとして、最良の設備をもつホールを準備し、美しい装飾と、きれいな音楽（良いバンド）人々の讃美を受ける様なフロアショーそして適切な飲物など提供するのも良い考えです。亦良く準備された模範的ダンス（デモンストレーション）が行われる晩です。デモンストレーションは支部内で行われる最良のダンスを代表するもので、見ている人々にダンスを習いたいと言う希望を持たせる様にしましょう。デモンストレーションを行うためにダンス委員（ダンスクラス指導者によって選ばた、ＭＩＡ会長会の認可を受けた者）は早めに計画を責任の分担をしなければならない。何回も練習して良く準備したものを見せましょう。亦この様な特別の人だけが行うダンスはなるべく短時間で終らせる様にして皆で楽しく想い出に残る夕べを持ちましょう。

（註「金と緑」のダンスパーティや其の他の催しに於て女王を選定することはＭＩＡ中央管理委員会の実行委員により許可されていません。）



(1961年5月用)

神学

「教義と聖約」

第三十二課「聖霊の賜」
(テキスト「教義・聖約」第四十六章)

目的「聖霊の賜とは何であるか、また聖霊の賜が与えられるわけは何であるかを理解すること」

このレッスンで学ぶ啓示は千八百三十一年の春、第四十五章の啓示があった次の日(三月の八日)に授けられましたが、それは当時教会の会員たちについて流布されていた多くの愚かな話があった結果として、教会の会員たちを力づけるために授けられたのでありました。また、この第四十六章は、教会の会員たちが心に抱いていたいくつかの間違った考えを正すために主がお下しになったものであります。

教会の歴史係ジョン・ホイットマーによると、その当時非教会員には聖餐式に出ることを許すべきでないと信じていた会員が幾人もありました。また、非教会員が聖餐式に出席するのを許さないことはモルモン経の中に述べてある通り、復活の主がニーファイ人たちに賜わった御教えに反すると感じていた教会員たちもありました。すなわち、

「汝らたびたび集会をせよ。集会をする時には、何人にても会に出席することを禁ぜずして集りに来ることを許し、その者たちのために祈りて、決してこれを追出すべからず。その者たちたびたび汝らの集りに来りなば、汝らはこれがためわが名によりて御父に祈るべきなり」と(ニーファイ第三書十八〇二十二・二十三)。

「教義と聖約」の第四十六章第一節から第七節までには、この問題を明らかにするため「この神権時代」に教会へ主がお下しになった充分な知識がのっており、また教会の集会に就いての主のみこころがのっております。始めに長老たちは自分たちの「利益と学問とになるため」、「聖きみたまの導き示したもうままにすべての集会を指導」せよと命ぜられて居り、またつづいて、当時いくつかの議論があったことにつき「さりながら、汝ら世の人の前に於て行う公けの集会より何人をも斥けざることを命ず」(「教義と聖約」四十六〇二)という誡命を受けて居ります。この指示をもっと明瞭にするため、聖餐会は一般に公開した集りであることを示して「また汝らに告ぐ熱心に王国を求むる者あらば、何人にまれ聖餐会より斥くることなかれ」(「教義と聖約」四十六〇五)と言ってあります。

これと同じ誡命はまた「入会確認の会」についても言ってあります(「教義と聖約」四十〇六)。この「入会確認の会」とは当教会の「断食集会」もしくはバプテスマの後で開かれる集会で、その時新しくバプテスマを受けた者に聖霊を授けるのであります。このほかに当教会には非公開であると考えられるいろいろの集会がありますが、それらは補助組織の役員祈りの会もしくは役員および教師の集会のように、教会の或る会員だけが出席する集会であるからであります。

この啓示(第四十六章)の中には、教会の会員と聖餐会に関する指示がのっております。教会の会員たちは聖餐会に出席することを歓迎されますが、もしも隣人に対して罪を犯しているならば、聖餐をいただく前に、その隣人と「和らぎを得る」ように勧告されてい

ます（「教義と聖約」四十六〇四）。

「わが前に正しく歩む」こと

主がお与えになった最も大切な勧告の一つがこの啓示の中に表われていますが、それは

「されど、汝らに命ず、すべて何事も惜むことなく与えたもう神に願うべし。またみたまの汝らに証したもうことを汝らの為すはわれ正しく望むところなり。すなわち汝ら全く聖きこころを以てこれを為し、わが前に正しく歩み、汝らの救いの末に就きて考え、祈りと感謝を以て何事をも為し、かくして悪霊または悪魔の教えまたは人の造りたる戒めに陥らざる様に為さんことを。そはある教えは人より出で、また他の教えは悪霊より出ずればなり」（「教義と聖約」四十六〇七）という誡命であります

この聖句は中に何と言ってあるから非常に大切でありますか。「永遠の生命」を得る基となるいくつかの原則に目をつけて下さい。それらはすなわち㈠惜しむことなく与える神さまに祈れ、㈡みたまを授かって、そのはげましをけんそんに受け入れよ、㈢主の前に正しく歩め、すなわち誡命を守ること㈣生存の目的が「自分の救いを働き取る」ことであることを常に忘れるな、㈤祈りの精神で、自分の受けた数々の祝福を感謝せよ、ということであります。この勧告を履み行う人々にはどのような祝福が約束されておりますか。これらの人々は、人間の考えにだまされることもなければ、悪魔の教えにだまされることもないにちがいありません。

「みたまを受けることが大切」

「みたま」を受けることの必要を知るのは、教会の会員たちにとって非常に大切なことであります。旧約聖書の時代に、多くの予言者の生活の中で聖霊が働きたもうたこと、ならびにキリストの使徒の時代にも同様のことがあったことは、「この神権時代」の教会員たちが一般に知っております。それと同じ「みたま」の命を受けて、当教会の指導者たちは「この神権時代」の始めからずっと、聖霊を受けることの必要を教会の会員に勧告してまいりました。

「ジョセフ・スミスとマーテン・ヴァン・ビューレン」

千八百三十九年十一月二十九日予言者ジョセフ・スミスとエライヤス・ヒグビーとは、ミズーリ州で聖徒たちに加えられた犯罪の賠償を求めるに当って、この使命の一部としてワシントン・D・Cにヴァン・ビューレン大統領を訪れました。その時の会見で大統領は予言者に、末日聖徒は当時の他宗派の人々とどこが違っているかとたずねました。すると予言者は「バプテスマの様式と、按手によって聖霊を授けることが違っております」と答えました。これはどういうことを言ったのでしょうか。ほかの場合に予言者の言った教えから明らかであるように、それは水の中に沈められるバプテスマを受け、次に主から承認された資格のある神権者の按手を授けることによってだけ聖霊の賜を授けられることができる、ということであります。これからこのレッスンを勉強して行くにつれて、この原則がはっきりしてまいりますが、次にこの原則を確立するジョセフ・スミスの確かな言葉があります。すなわち、

「ペテロのしるしは、悔改めをして、聖霊が与えられるという約束と共に、罪を赦されるためのバプテスマを受けることであった。その他の方法を以てしては決して聖霊の賜は得られない。

バプテスマは聖霊を受ける準備のための聖なる儀式であって、バプテスマこそ聖霊が施される経路であり且つ鍵である。

按手による聖霊の賜は、義の原則以外の原則を通して得ることはできない。もしも提案が同意されないならば、撤回するほかは全部むだであるからである」。

教会へ改宗した者たちだけが聖霊の賜を受けたという事実は、「時の絶頂」（キリスト在世の時から使徒の時代に至る）の時代に於けるイエス・キリストの教会の一つの特色でありました（使徒行伝二〇三十七・三十八、八〇十二―二十三、十九〇一―七参照）。しかし聖典の中に数えてある数々の「聖霊の賜」はどうでありましたか。これらは教会の忠実な会員たちに授けられましたか。答えは「然り」であります。使徒たちがみなこの世を去ってしまった後に聖霊の賜がなくなってしまったということは、大きな背教があった一つの証拠であります。このように聖霊の賜がなかったということは、教会歴史に関する多くの権威者が認めて居ります（ゼイムス・E・タルマッヂ長老著「信仰箇条の研究」

六六六頁の「ウェスレイの著述」からの引用を見よ)。

「聖霊の賜の目的」

主は何の目的で、主を真に信ずる人々へその賜をおさずけになるでしょうか。世の中には、生命と救いの計画に反対する多くの力が存在するからであります。では、聖霊の賜は「完成への途上」にある人をどのように助けるでありましょうか。

「この故に汝ら欺むかれざるよう警しむべし。また汝ら欺むかれざらんために熱心に最善の賜を求めよ。而して常に何の為に与えらるる賜なるかを憶ゆべし。

われ誠に汝らに告ぐ。そはこの賜はわれを愛してすべてのわが誠命を守る者、またかく為さんと求むる者のために与えらる。こはおよそ求むる者、またわれに願う者また願えども己が欲望を充さんために徴を願わざる者たちのすべてを益するために、与えらるる故なり」(「教義と聖約」四六〇八―九)

この中の「汝ら欺むかれざらんため」という言葉がすなわち、何の目的で与えられるかと言う問に対する答えであります。聖霊の賜は主を愛してすべての誠命を守る者たちを益するために与えられるイエスキリストの福音の一部であることに目をつけて下さい。しかし、この人たちは誰でありましょうか。この人たちはすなわちイエス・キリストの教会の会員たちであります。それはこの人たちがバプテスマと按手によって聖霊を授けられる儀式に従ったからであります。しかし、教会の会員であってもすべての誠命を守ってはいますまい、それならこの人はどうでしょうか。啓示の中には「またかく為さんと求むる者」と言ってあります。主は罪を見のがしたまわないけれども、悔改めの原則によって自分自身を完成するため心からの努力をして、自分の救いをはばむところの壁を乗り越えようと熱心に努めている教会の会員には助かるために必要な援助をお与えになるにちがいありません(「教義と聖約」一〇三十一―三十三参照)。

「聖霊の賜」

教会の会員たちに授けられるこれら聖霊の賜とは一体何でありましょうか。パウロはコリントの聖徒たちのためにこれらの賜を表にして示しました(コリント前書十二〇一―十一参照)。また、ニーファイ人の記録を記し終るに当ってモロナイもまたこれら「みたま」の賜のいくつかを述べました(モロナイ書十〇八―十九)。

今日の聖徒たちは「汝ら教会員に与うる神の賜の何なるかを汝ら常にこころに留め、常に憶えんことを欲す」(「教義と聖約」四十六〇十)という勧告の言葉を与えられています。しかしながら、これらの賜は無差別に授けられるものではありません「すべての者、必らずしもあらゆる賜を与えられしにあらず。何となれば、賜は多くあれどすべての人は神の「みたま」によりてその一を受くればなり」(「教義と聖約」四十六〇十一)。

第四十六章の啓示の中で明らかにされた数々の賜を総括して、「教義と聖約の註解」二七四―二七六頁(英文)には次のように述べてあります。

㈠知識 ㈡信仰 ㈢管理の務め ㈣みたまの働きの認識 ㈤知恵 ㈥教える賜 ㈦医される信仰 ㈧医す信仰 ㈨奇蹟を行う能力 ㈩予言の賜 ㈪霊を見わける力 ㈫異言を語る賜 ㈬異言を釈く賜 ㈭これらの賜をすべて見分ける力。

これら「みたま」の賜をすべてもつ特権は「教会の頭首」である「予言者、聖見者、啓示を受くる者」に与えられることがあります(「教義と聖約」四十六〇二十九、百七〇九十二参照)。

「聖霊の賜と按手」

聖霊の賜について、千八百四十二年六月十五日に予言者ジョセフ・スミスが書いた記事がありますが、その中で予言者は、水に沈めるバプテスマの後で聖霊が授けられる時に、なにか奇蹟的の現われがあると、時々人々が期待していると特に言っています。こうした考えに対する解答がその記事の中にありますが、それを抜き書きしますと、

「まわりに居る群集の目に見える現われはもっと度々全然起らなかった。……今仮りに、頭の上に手を按くや、直ちに、すべての者が「みたま」の賜を完全に受けるとせよ。懐疑論者はそれでもまだ、前のような単なる偶発的の場合は別として、証しを受けるどころの話ではない。何となれば、「みたま」の賜は必らずしも肉眼によって見えずまたは人間の理解するところではないからである。実際、そのごく僅かしか人の目に触れな

い……。

智恵の言葉と知識の言葉とは、他と同様に賜であるが、それにもかかわらず、もし或る人がこの賜を二つとも持っているとしても、もしくは按手によってこの賜を二つとも授けられたとしても、誰にそれが解ろうか。また、別の人は信仰の賜を持っているかも知れない。しかし、人々は前と同様、そのことを少しも知らない。または仮に或る男が医しの賜または奇蹟を行う力を持っているとせよ。しかも、そのことは当時誰にも解らないであろう。これらの賜を働かせるには時間といろいろな事情とを必要とするであろう。また仮に或る男が霊を見わける能力を持っていたとせよ、それが誰に解ろうか。もしくは、その男に異言を解く能力があったとしても、誰かが人の知らない言葉を話すのでなければ、もちろんその男は黙っているほかはないであろう。見えるようにしようと思えばすることのできる賜が二つだけある。それはすなわち異言の賜と、予言の賜である。以上は最も多く人々が論じていることである……。」

「聖霊と主のみたま」

後のレッスンで、主のみたま（キリストの光）という問題についてもっとくわしい研究をするはずでありますから、ここでは主のみたま（もしくはキリストの光）と聖霊と聖霊の賜との間にはそれぞれ違いがあるということだけを言っておきましょう。主のみたま（キリストの光）とは、神のみもとから出て全宇宙を満す「みたま」であって、「聖きみたま」、「神のみたま」などとも呼ばれています。主のみたまはあらゆる人に与えられます（「教義と聖約」八十四〇四十三―四十八、八十八〇六―十三）が、聖霊の賜はイエス・キリストの教会員であって、主の誡命に従う人々（使徒行伝五〇三十二参照）にだけ与えられます。次に挙げる簡単な説明はジョセフ・F・スミス大管長の言葉でありますが、この考えをよく説明してあります。

「主の「みたま」と聖霊とは違っているかということはよくきかれる質問である。この二つの言葉はしばしば、同じ意味で使われている。聖霊のことを度々神のみたまということがあり、また同じように神のみたまを聖霊と言うことがある。しかし、聖霊は神会に属する御方であって、あらゆる人間を照らし万物を貫いてあるところのものではない。キリストを通じて全世界にさし出で、あらゆる人間を照らし、万物を貫いてあり、人の子らをはげますところのものは神のみたまである。この神のみたまはたえず人の子らをはげまして、ついに人の子らに真理を知らせ、一層大いなる光明と聖霊の証しとを得させる。しかしながら、もし人の子らがこの一層大いなる光明を得てからそれに背く罪を犯すときには、神のみたまはもはや人の子らをはげますことなく聖霊は全く彼らを離れたもうにちがいない」（「福音の教義」六十七、六十八頁（英文参照）。

「聖霊の賜」を授かるには どうすればよいか

第四十六章の啓示で明らかにされているように、聖霊の賜はすべての誡命を守る者、もしくは誡命を守ろうと努力する者に与えられます（「教義と聖約」四十六〇九参照のこと。しかし、教会の会員はすべて次に挙げる神の命に依って願うことによって、与えられようと努力しなくてはなりません。

「すべてみたまによりて願う者はみたまによりて与えらるべし……。みたまによりて願う者は、神の旨によりて願うなり。この故に正にその願うが如く聽かるるなり。われ、また汝らに告ぐ。汝らみたまによりて為すことは、何事にまれすべてキリストの名によりて為されざるべからず。汝ら如何なる祝福を受くるとも、みたまによりてこれを神に感謝せざるべからず。また汝らはつずけてわが前に徳と聖きを行いに表わさざるべからず誠に然り。アーメン」（「教義と聖約」四十六〇二十八、三十―三十三）

討論のための質問

(一) 第四十六章七節に「永遠の生命」を得るための欠くべからざる大切な知識が述べてあると信ずる理由を挙げなさい。

(二) 第四十六章の啓示によって、聖霊の賜は特別な賜であると考えるべきであると、なぜあなたは信じなさいますか。

(三) 聖霊の賜を授ける主な目的は何でありますか。その他の目的は如何。

(四) 聖霊の賜はどんな人々に与えられますか。

(五) 第四十六章に啓示してある何が聖霊の賜を授かるために必要でありますか。

家庭訪問教師のメッセージ

「教義と聖約」に基いて実践する真理

メッセージ第三十二「教義と聖約」第四十二章三十八節から

「そは汝らがそれを捧ぐるならば彼らのいと小さき者に捧ぐるとも皆われに捧ぐればなり」

目的　もしも私たちが主の御業をするならば、他人を助けるため活潑に事に従わなくてはならないことを学ぶ。

おそらく、「教義と聖約」第四十二章の三十八節の聖句くらい扶助協会の仕事と家庭訪問教師の仕事に直接あてはまる聖句はないでしょう。『「あなたがたは、私のしているのを見ている通りの働きをしなさい」とイエスがお言いになった』という聖句は、扶助協会の基本をなしている大切な言葉であります。どのような働きをイエスはなさいましたか。聖書の証明するところによると、イエスはその福音伝道の始めから終りまでずっと「よい働きをしながら」（使徒行伝十〇三十八）巡廻なさいました。福音は、教会員に病んでいる人々を訪問し、嘆いている人々を慰め、元気を失った人々を助けよと教えています。「教義と聖約」第四十二章三十八節にある奉仕の教義は、さきに救い主がオリヴの山で弟子たちに教えをお説きになったときお聞かせになったもので、その時主は末日に起るいろいろの出来事の有様を話して、「人の子」が栄光を帯びて来る時、「人の子」は神の民を審くであろう、そして義しい者たちには「あなたがたは私が空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿をかし、……病気のときに見舞い、獄に居たときに尋ねてくれたからである」（マタイ伝二十五〇三十五・三十六）と言うであろうと仰せになりました。その時義しい人々は当惑して、主のためにいつこれらのことをしたのか知らと思うでしょう。すると、主はそれに答えて次のようお言いになるでありましょう。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」と（マタイ伝二十五〇四十、二十五〇三十五―四十参照）。

他人に対するこの奉仕の教義はひとり扶助協会の基であるばかりでなく、あらゆる宗教思想や文学思想に深くしみ込んでおります。

「神さまが一番お喜びになる働きは、人類に良いことをすることである」とベンジャミン・フランクリンはかつて申しました。モルモン経にあらわれた偉大な王であり予言者であるベンジャミンは「お前たちが同胞のために務めるのはただお前たちの神のために務めることである……」（モーサヤ書二〇十七）と言って、この思想を美しく表現しました。有名な物語「ローンファル卿の幻」の中には次のような印象的な言葉があります。

「義務の感じで黄金を与える者は価値のない黄金を与えるだけである。

さりながら、心から貧者の一燈を捧げる人、しかも目に見えぬものにそれを捧げる人は両手に余る施しものをするである。

心はしきりに望んでその手をひろげる、投げ与えるものではなくて、分け与えるものが欲しいのだ。

贈り主のない贈り物は何の内容もない。

施しと共に自分を与える人は三つの者を肥やしている自分自身と飢えている隣人と、そして私とを」

天にまします父なる神さまは全能でありますから何でもなさることができます。それにもかかわらず、父なる神さまは、私たち神の子らによって神の良い働きがなされなくてはならない「神聖な計画」に従っておいでになります。病気をして悩んでいる人たちが幸わせになるように祈ることはよろしいけれども、必要を感じている人々を実際に助けたり慰さめたりする行いを伴なわなければ、その祈りは空虚な言葉にすぎません。私たちは隣人が幸いなように願うことはできます。しかし私たちが隣人の境遇を少しでも良くするような事をしないならば、「やかましい鐘やさわがしいにょう鉢」と同じであります（コリント前書十三〇一）

主の「神聖な計画」は私たちが善を行うために尽力することを要求しています。もしも世界中に親切が行きわたるはずであるならばただ単にそれを願っていたり祈っていたりするだけでは実現ができません。それは私たちが実際に

親切な行いをし「私の兄弟であるこれらの最も小さい者の一人に」までも善い事をさえすれば実現するちがいありません。

モルモン経にあらわれた賢明な予言者はこの事実を「ねがわくは、私がお前たちに話をしたように日々自分の罪の赦しを保ち、罪無しに神の前を歩くことができるように、お前たちが一人一人みなその財産の多い少いに応じてそれを貧しい人々に分け与えることを望む。それはたとえば、腹のすいている者に食物を与え、はだかでいる者に着物を着せ、病んでいる者を見舞い、各々の必要に応じて肉体についても、霊についても、救助を施すことである」(モーサヤ書四〇二十六)と言って強調しました

これこそ純粋な宗教の本質であります。これこそ主が「彼らのいと小さき者に捧げるとも皆われに捧ぐればなり」(「教義と聖約」四十二〇三十八)と仰せになった言葉の本当の意味であります。

社会科学

「核時代に於ける霊的生活」

第十四課　今の時代のための豊かな生活

目的　これまで二年に亘ってつずいたこのレッスンの中で学んだ題目をふり返ってみて、今の時代を豊かに送る助けとなるために、その題目の内容が働くことのできる役割と、働かねばならない役割とを強調する。

はしがき

この核時代の中で、霊的の道をたどり霊的生活を実行するということは、私たちに対し、やれるかどうかやってみよという挑戦であって、それは私たち一人一人が引き受ける挑戦ではあるが、重荷として引き受けるには及ばない。それはむしろ私たちがこの世で得られる最も胸をおどらせるような、そして私たち自身を満足させるような経験をさせることができる。酬いられた生活とは、理くつをつけることによって、解釈をし直すことによって、また現実に直面しないことによって得られる安易な道や心の安らぎというものではないからである。酬いられた生活とはむしろ多くの難問題に立ち向ってこれを解決し克服し、また艱難辛苦をふみ越えて、これ以上はないという生活をし、持っている限りを尽してよくやったという感じが出てくるところにある。私たちはこれまでに、人がいつ何時でも、特にこの核時代の中で、良いものを造り出す生活、満足な生活、実効のある生活をするためには、感情的な面でうんとおとなにならなくてはならないことを、提議してきた。私たちに、キリストの教えを実践することができるためには感情的な面で非常におとなになる必要があることを論じた。感情的な面でおとなになることは、一生の努力であるばかりでなく永遠につづくものであると解釈をした。また私たちは、一度におとなになるのではなくて、円熟の度を増すように一生けんめい努力をつずけていると一歩一歩目標に向って進歩するものであることを認めた。私たちの子供に私たちと同じになるように模範を示すことができるために年令と発達の段階に応ずる成熟のふるまいをすることが大切であることを強調した。感情的な面で非常におとなになるということは、キリスト教の教えを実践することができるためばかりでなく人間一人一人が生れつき持っている権利であると、私たちが信じている、個人の成長を自分で経験するためにも大切なことである。それは結婚生活で成功を収める基いであり、立派な父母となるために欠くことのできない要素である。

私たちは、宗教の面で成熟するという考えの内容を研究し、その価値を示す基準を示そうと努めた。宗教的成熟ということは今日になるまでほとんど注意をされなかった考えであるので、その方面には私たちが肉体的、知的、社交的および感情的な面で成熟をする場合よりも、おそらくはるかに成功を収めにくいところがある。それであるから私たちはこの思想の区域を研究することは酬いられる経験であったと信じている。何となれば、本当の意味のキリストの福音とは、少年少女に公式一点ばりの教えをつめこむようなものではなくて、むしろ一人一人が自分自身の著しい特色をなしている人間としての力をことごとく発達させることを奨励する宗教であるからである。

私たちが宗教的成熟という考えに対して、一度何ほどかの注意を払い興味を集中するときには、私たちがもしも永遠の進歩、すなわち私たちもいつかついに神のようになれると考えている永遠の進歩をするはずであるならば、宗教的に立派な成熟をするということの

重要さが明らかになると思われる。しかしながら、宗教的に成熟したことに対するもっと直接な酬いは「キリストの足跡をふんで歩く」能力が増したことである。

豊かなそして何か良いものを造り出す生活は、今日一人一人にとって一層満足すべき生活の一様式になるだけでなく、平和な世界をつくる援助に向って、また人間が自分自身と調和して自分自身の内にあるものを最上に経験するような世界を実現させる援助に向って非常に役立つはずである。

私たちは、神について持っている考えを注意してよく考えてみることによって、私たちの宗教的視野を拡げたと思う。全く、もしも私たちが魔術的の助け手である一種の神に対する恐れ、すなわち宥和や訴えを必要とする恐れよりもむしろ愛の精神を以て神に近づくことができるならば、私たちは一層良いものを造り出す意義のある関係をはっきり立てることができるにちがいない。

人間についての私たちの考えもこれまでよく考えてみて、私たちの宗教的視野を拡げる助けとするはずではなかったか。私たちが人間をもともと悪であると考えようと、もともと善であると考えようと、もしくは善でも悪でもないと考えようと、どの近づき方も私たちの対人関係に著しい影響を及ぼす。人間は神の子であって、人間の性質の中には神と同じ性質が具わっていると云う末日聖徒の知識は、愛と理解とを以て喜んで人に近づこうとする願いと能力とを私たちの心の中にひき起す。このような、良いものを造り出す調和関係の上に始めて平和な世界の基を築くことができるのである。

神についての考えと人間についての考えの二つに密接なつながりのあるのは、人間と世界との関係についての考えである。重ねて言うと、神は私たちすべての人類の父なる神であり、私たち人間はすべて父なる神から生まれた兄弟同志であるという末日聖徒の教義は私たちの宗教的視野を大きくする助けとなり、またこの核時代の中で霊的の生活を一層有効に送る助けとなるものである。

人間に起る宗教的発展をいろいろの段階に分けて考えることは、私たちの多くにとって新しい経験であったかも知れない。もしもそうであるとすると、私たちが宗教的の考えを子供たちに教える一層適切な頃合を計ろうとするときに両親としてまた教師としての私たちに、これから先一層の理解を与え、一層効果ある教え方をさせることであろうと思う。同時に、私たちは自分が本当に円熟の水準に達しているか、または私たちの発達が幼年期か青春期かの線で止まっておりわしないかということを知るために、自分自身の発展段階を注意して調べたことと思う。

価値といものは、私たちの宗教上の考えに於ても私たちの実生活に於ても大きな役割を演ずるので私たちは価値の増大と価値の意義につき一課を費やして考えを集中した。このレッスンを真面目によく考えてみるならば、私たちが自分の持っている価値を注意深く調べてみることに、また私たちの価値が互いに衝突することに、また非常に大切であると思っているいろの価値をどれほど適切に私たちが身につけているかを評価することに役立ったと思う。自分自身のためにもまた自分の子供たちのためにも、価値を発展増大させることは私たちの肩にかかる最も大きな責任の一つである。重ねて言うと円熟についてもそうであったように、価値の増大はこれでしまいと言うものでなくどこまでもつずくものであって、私たちの価値は絶えず探求し、修正し、大きくするものでなくてはならない、ということを私たちは認めた。

価値に関聯している私たちの大きな責任は、家庭と家族というわくの中で、宗教的の価値が成長することのできるそのやり方である。子供たちが物事に善い悪いの「価値をつける」経験はごく早いころから始まる。前のレッスンでは、家族が人格を形造るものとして働らくことを認め、この点に於ける家庭の責任を強調した。また私たちは、一人一人がいつまでも続く、高度の価値を発達させるには、まず自分自身のためになる一つの価値と人間というものの威厳を発達させておかねばならないことを認めた。もちろん、私たちは自分自身の中にあるいろいろな価値を発達させるときに、このことも私たちの視野を広くし、現在の複雑きわまるしかも急速に変りつつある世界の挑戦に対抗する役に立つ柔軟性を私たちの身につける力となることを望むものである。

私たちは、自分の子供たちを現在のためにはもちろん、明日のためにも育てているのであるから、

また私たちは今の世界が今まで経験したことのないほどの速さで変りつつある上に、その変り方が信じられないほどの加速度を以て進んでいると思われるから、それだけ私たちに対する挑戦は圧倒的に大きい。私たちは自分の子供たちの顔をのぞきこむときそこに未来の姿を認める。そこでもしも私たちが本当に責任をとるならば、私たちはこれからさき将来の世界を造る子供たちを今育てているのであるから、私たち父母たる者がすなわち将来の世界を造るものであるということを強く感ずるにちがいない。

「信　頼」

豊かな生活は自分に対する信頼と確信、資格が充分にあるという感じ、正しいことをする力が自分にあるという感覚、適当な速さで成長発達しているという感じおよび人はいつでも改善の余地があることを認めるものではあるが、自分のもっている力を完全に出しきっているという満足感などをもとにしてその上に営まれる。また豊かな生活は、人がその隣人に近づくことができ、正しいことをすると期待することができ、彼の現在の環境訓練経験等から考えて最善を尽すと期待することができるために隣人に信頼を置くことを基にして行われる。終りに、豊かな生活は神を信頼すること、人類相互愛、およびこの地球を私たちのもっと住みよい処、また私たちが「人に不死不滅と、永遠の生命をもたらす」神の御業を助ける働きに従事していると本当に信じている処にするため、役に立つ仕事を神と共にしているのだという感覚を基にして営まれなくてはならない。

「心の奥の満足」

本当に心の奥に満足をしているという感じは、自分が今進歩している、成長発達している、真に経験をしているという具体的の証拠から生ずる感じである。この満足感は、人が自分のもっているいろいろな問題や世の中の問題を、舟のへりから塵あくたを海の中へ投げこむかのように精神的に投げすてるときに起るような安心から本当に出てくるものではない。または、個人的の責任、社会的国家的の責任を「あいつにやらせろ」と言って他人にわたしてしまうことによって起るような安心から本当に出てくるものではない。心の奥の満足は、むしろ人が自分の分け持つ責任を受け入れている、自分の直面しているいろいろな挑戦、とくに観念の世界で起ってくるいろいろな挑戦に対抗するために全力を挙げて備えているという実感から出てくるものである。

ロバート・P・クロフォードは「人生に於ける悲劇は頭悩の力や教育の欠如ではない。自分の持っている力をほとんど使わないことである」と言った。またロジャー・ベーコンの標語は「何事でもそのまま勿論のことと思うなかれ。君の目を用いて、君の手を用いてあらゆる新しい学説の真偽を調べよ」であった。

心の奥の満足という考えは「君は心の休み（静止）をとるがよろしい。僕はむしろ、休まぬ心（活動）をとろう」という言葉が最もよく真の意味を総括している。

「この世界は在って心安らかであること」

現在世界中には極度の不安があるしかも人類の一人一人が自分の力ではどうにもならない巨大な力をもった宇宙の中に難破していると感ずる、一種よるべのない感覚からおそらく生ずる極度の不安がある、と思っている人がたくさんいる。この宇宙時代は、子供にとって刺戟的なゲームか、それでなければ児童小説にすぎないのか。科学というものは、国際間の競争に役立ったためにだけあるのか。私たちは自分のもっている信念をもっと有効に伝えるために、人間の役割について明確な定義を持たなければならない。また同時に「私はどんな立場をとるか」という人類根本の質問に答えるため、自分自身の解答をみつけるように子供たちを力づけなくてはならない。確かに「原子」は危険な働きをする可能性がある。そう言うならば蒸気も電気も、人間のもっている怒りも失望も無智も、同じように危険な働きをする可能性がある。このように「出てくるかも知れない危険」についてどうしょうか。私たちは「ダチョウ」のように頭を砂の中へ突っこんで、それが、「シンキロウ」のように消え失せることを願おうか、またはそんな危険は絶対になかったことを望もうか、またはそのような傾向を楽しげに無視しょうか。私たちはどれもしない。私たちは危険に直面して、その危険を私たちが支配することのできるよう、できるだけ詳細に知ろうとする。

私たちは、自分の子供たちに絶対の安全感を与えるすべがない。

しかし、私たちが出きるかぎりを尽して、子供たちに自らを支配する力を与え、この世界に在って心安らかに感ずる力を与える方法はいくつもある。

「隣人の事を本当に心配し愛すること」

私たちの時代と私たちの子供たちにとって大きな主題となることは、人がその宗教上の信仰を深くすると共に、他人の宗教を一層尊敬するようにならなくしてはならない、一層尊敬しなくなってはいけないということである。子供たちの人格を造り上げるのはその両親である。模範を示して、自分が口で言い表わした価値の正しいことを実際に証明するのは両親である。それであるから、両親たる者は自分自身の持っている信仰を深く吟味せねばならない。両親は「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」（マタイ伝十九〇十九）という主の誡命を本当に守っているか。

両親は自分たちの生活と子供たちの生活とを、新しい違った経験に対して閉ぢてはいないか。両親は新来者や外国人たちを胸をおどらせる思いで迎えるか、それとも彼らが自分たちを好いているかどうかを見つけるために頭のてっぺんから足の先までじろじろながめはせぬか。

本当の霊的生活を営み、世界平和を達成し、私たちの心の中に真のクリスチャンが具えるべき価値を成長させるには、隣人の事を本当に心配し、愛さなければならない。この性質を発達させることによって始めて、私たちは神のような特性をもつこともできるという事実を経験することができる。

「実際に役立つ人生哲学」

もしも或る人が、自分の生命とこの世界に充ち満ちている生命と自分との連鎖がどんなにか驚嘆すべきものであるかについて考え始めるならば、生命に対する尊敬と感謝と崇敬の念を持たないではおられないにちがいない。この結果としてこの人はこの世界に存在する不愉快な要素と多くの人々の生活のことを考えて、一層深い関心と心配と悩みとを経験するかも知れない。しかし、それと同時にこの人の生活は一層豊かに、一層美しく、一層幸福に、なるにちがいない。それは単に生きているだけでなくて、本当に生活を経験することになるのである。

今日、この世の中で豊かな生活を営み且つこの核時代に於て霊的に生きて行くためには、宗教的確信という、堅固な基礎を必要とする。私たちは神を信頼する確信とその上に神は私たちを善く創りたまい私たちの一人一人が自分の持っている善を見出して大切にすると共に、他人の中にある善もまた見出して大切にするようにさせたいと思っておりたもうという信仰を必要とする。この真理はいろいろの神秘な儀式の中にはない、または私たちのために責任を負っている誰かの中にも見出されない。この真理はむしろ、「自己能力の達成」という努力と円熟と愛の宗教を実践しようという心がまえと、神と神の子らとを理解することによって得られるのである。

「総　括」

私たちの目標はこの核時代の中で霊的の生活を営むことである。これを立派になしとげた時に与えられる酬いはすなわち、常住不断豊かな生活ができるということである。神の御業を助けるという私たちの貢献が、肉体を具えているという状態にある神の子らのために、また「この神権時代」に於ける神の子らのために神がお立てになったいろいろの目標を達成するのである。今まで続いたこのレッスンを終るに当って、また私たちがこれまで考えを集中してきた挑戦に対して捲土重来の勢を以て直面するに当って、私たちが次に挙げる作者不明の引用句を常に念頭に置くよう念願する次第である。

「ただ一度きりの生活、私たちがこの地球の上で営む生活はただ一度きりだ。
一度きりの生活の中で学ばねばならぬことが何とたくさんあることか。
私たちの価うちを求め、価うちを見つけ、価うちを証明すべきことが、何とたくさんあることか。
登らねばならぬバラ色の山頂、ふみこえて行かねばならぬ道の多いことよ。
されば、当途もないむだな探求に時を費やすなかれ。
浪費するとも心して有効に使おうとも時間は君のものだ。
善行を延ばすは愚者のすること
「明日ありと思うな」と人は言う。
未来は神のもの、君の持っている機会は今日、しかも今だけである。」

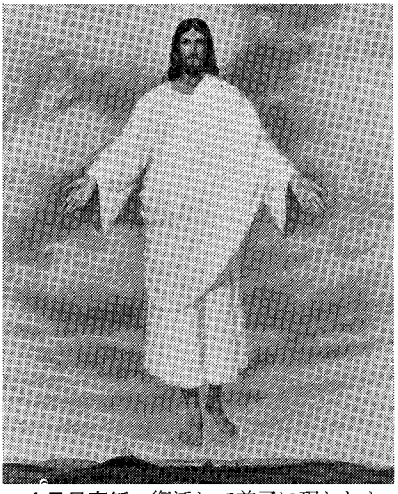
支部所在地

阿倍野　大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八
旭川　旭川市八条五丁目
福岡　福岡市東薬院二ノ四〇
群馬　高崎市並榎町二七五
広島　広島市古田町古江四〇〇ノ三
金沢　金沢市成瀬町一一ノ四　野田方
甲府　甲府市山田町六三
松本　松本市沢村町一六〇四
室蘭　室蘭市幸町八九
名古屋　名古屋市昭和区北山町三ノ四一
新潟　新潟市中大畑町五五七　金井方
電(二一一八六六一)
西ノ宮　兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四
岡町　大阪府豊中市岡町北二ノ一八
岡山　岡山市弓野町六一
小樽　小樽市富岡町一ノ三五
三ノ宮　神戸市灘区篠原本町四ノ三五
電(八二一六〇一)
札幌　札幌市北二条西二四丁目
仙台　仙台市光禅寺通り二八
電(五一〇八九七)
東京中央　東京都渋谷区八幡通一ノ三四
電(四〇八一三三〇七)
東京北　東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八
電(九五一一六〇一四)
東京南　東京都大田区南千束町二四九
電(七八二一六一三一)
東京西　東京都武蔵野市吉祥寺三六八
電(二一一七五八〇)
山形　山形市八日町五八〇
柳井　山口県柳井市今市三九一
横浜　横浜市港北区篠原町二九
電(四九一一八七七二)
普天間　沖縄宣野湾村野嵩区三二八
那覇　沖縄那覇市松尾区一三九

編集後記

今年は四月二日が復活祭に当ります。おおかたの人々は野に山に行楽の旅に出かけていて、東京の繁華街には、クリスマスのような雑踏とけん騒と黄金と物欲とがうず巻いていないのは本当に心休まる楽しい思いがします。世の中の多ぜいの人たちが復活祭をそれほど心にかけていないので、マンモンの神（金の神）に身も霊も捧げている抜け目のない商人たちが、復活祭の大売り出しや「復活まつり」をやり出さないから、人々は公園で鳩にたわむれたり、お堀の鯉に餌をやったり、白鳥をじっと眺めて居たり、本当に春のささやきを心の底で味わっているのだと思うと、嬉しいような悲しいような気がします。ともあれ「復活」はキリスト教を支えている根本の教義で、パウロが艱難辛苦をふみこえ一生を捧げて証詞をしたのは「キリスト復活」の事実であります。「復活」の信仰なしに救いはありません。このごろしきりに復活の歌が唱われるのを耳にして、何の「しるし」であろうかと考えています。

（佐藤竜）



4月号表紙—復活して弟子に現われた後より昇天するイエス

月刊「聖徒の道」第五巻第四号
一九六一年四月一日発行
実価　一ヵ年　六〇〇円
一　部　五十円
編集兼発行人　ポール・C・アンドラス
発行所　東京都港区麻布広尾町十四
末日聖徒イエス・キリスト教会
北部極東伝道部

聖徒の道
一九五八年三月十七日
第三種郵便物認可 第五巻第四号
振替口座東京七六二二六番
発行人 ポール・C・アンドラス
編集人
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会 北部極東伝道部
東京都港区麻布広尾町十四

内案書図

教義と聖約 上質革製合本……一一〇〇円
高価なる真珠
モルモン経 合本……三〇〇円
教義と聖約
高価なる真珠
モルモン経（新訳）……二〇〇円
信仰箇条の研究……三三〇円
モルモンとは……一〇〇円
完成への道……二〇〇円
初等協会教科書……一五〇円
総合聖句の手引……一五〇円
日本系図探究要覧……一〇〇円
古代アメリカの生活……一〇〇円
旧約聖書物語……一五〇円
家督権の祝福……一〇〇円
扶助協会手引……五〇円

日曜学校用

宗教と生活 II……一五〇円
よきおとづれ……一〇〇円
聖書物語……一五〇円
福音の実践……一五〇円
聖典中の指導者……一五〇円

MIA用

役員と指導書の手引……一〇〇円
モルモン経研究ガイド……一〇〇円
MIA手引（付録）……五〇円
演劇指導者基礎知識と脚本集……七五円
演説が上手になる法……一五〇円
社交ダンス必携……一六〇円
新しいフォークダンス……五〇円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌（新版）……四〇〇円
子等は歌う……一〇〇円
レクリエーション歌集……四〇〇円

……註文は各支部長へ……